青山同窓會報

《 発行所 》
青 山 同 窓 会
〒951-8127 新潟市関屋下川原町 2-635
新潟県立新潟高等学校内
TEL 025-266-5268
FAX 025-266-5268
《 編集・発行人 》
長 谷 川 義 明
《 印刷所 》
オリオン印刷株式会社
〒950-0963 新潟市南出来島1-19-1
TEL 025-283-2151
FAX 025-283-3804

新年のご挨拶

青山同窓会会長　長谷川　義明（61回）

青山同窓会会員の皆様におかれましては、お健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は新年会をはじめ、総会、学術文化講演会などの同窓会行事に多くの会員の皆様のご参加を頂きまことに有り難う御座いました。同窓の誼みによって世代を超えて、各界でご活躍の皆様のお話を直接伺うことの出来る同窓会行事は人生にとっても大変貴重な機会であると考えております。本年も皆様のご参加により同窓会の有意義な活動が活発に行われますよう宜しくお願い申し上げます。

昨年はインターネット上に新しく青山同窓会のホームページを開設するなど新機軸の事業が始まり会報や関連情報などもホームページで見ることが出来るようになりました。学術文化講演会では65回卒業の神林恒道氏より「會津八一の美学」と題する講演を頂きましたが大阪大学名誉教授で會津八一記念館館長でも在られる氏のお話は、元早稲田大学文学部芸術学科教授、歌人、書家そして新潟市名誉市民である會津八一氏（7回卒）の優れた美に関する感性を理解するうえでの広範な分析を試みられたもので、早稲田学生時代の恩師ラフカディオ・ハーンに学んだギリシャ古典主義の影響など會津八一氏の歌、書簡などの例を示しながらの大変わかりやすい説得力のあるおはなしを頂きました。また73回卒業の石黒久氏は大成建設アジア統括事務所長の現役でご活躍中ですが、新潟高校山岳部の経験から登山の世界に入られ、見事にエヴェレストの登頂に成功されております。日本人では植村直己隊に次ぐ成功で秋のエヴェレスト登頂は世界初とのことです。東南アジア諸国の事情についてのお話も伺いましたがマレーシア半島における山岳に遮られた各地での民族や宗教、生活文化の相異など土地と人とのかかわりに考えさせられました。

今年四月一日にはいよいよ新潟市も政令指定都市となります。昨年十一月の市長選挙で大差で再選を果たされた篠田昭市長（75回卒）の力量に大いに期待致したいと思いますし、同時に市民一人一人の地域社会への貢献の活動が名実共に新潟を政令指定都市にふさわしい大都市に育てて行くのだとおもいます。地域社会の多くの場面で活躍し大切な役割を果たしておられる同窓各位の益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げる次第です。

新年が会員の皆様にとって幸多き年でありますよう祈念申し上げます。

新年のごあいさつ

国土交通大臣政務官　衆議院議員
吉田　六左エ門（66回）

青山同窓会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

旧年中は、一方ならぬお世話になり本当に有り難うございました。

昨年九月、自信と誇りの持てる日本へという「美しい国、日本。」の政権構想の基で安倍晋三内閣が発足しました。

私もこの内閣の一員として、二〇〇一年に続き二回目の国土交通大臣政務官を拝命し、身の引き締まる思いと責任の重大さを痛感し、政務に全力を尽くし

◇青山同窓会新年会のお知らせ◇

青山同窓会会長　長谷川義明

明けましておめでとうございます。恒例の青山同窓会の新年会を開催いたします。

普段会えない方々と大いに歓談して頂きたいと存じます。

開催要領は下記のとおりです。各期幹事の皆様からも連絡をしていただきますが、参加を希望される方はお誘い合わせて事務局までご一報ください。

青山同窓会事務局
電話／FAX　０２５－２６６－５２６８
E-mail：niigata_aoyama@yahoo.co.jp

記

日時：平成１９年２月１６日（金）
　　受付　午後６時
　　開宴　午後６時３０分～
会場：ホテルオークラ新潟
　　TEL 025-224-6111
会費：６，０００円

ているところであります。

皆様のご指導ご支援で国会に送って戴き、私の果たすべきことは、新潟のため、日本のために粉骨砕身務めさせていただく事であります。

本年も大所高所からご指導賜りますよう心から、お願い申し上げます。

さて、新潟市は本年四月一日に、日本海側唯一の政令指定都市に移行し「政令市・新潟」として新たなスタートを切る歴史的かつ発展的な節目となる日を迎えます。

改めて、篠田昭市長をはじめ関係各位の皆様の並々ならぬご努力とお骨折りの賜物と深く敬意を表しますとともに、この機会を絶好のチャンスと捉えて、政令市のメリットを最大限に活用して、魅力と活力ある「真のまちづくり」の実現に向け、ご尽力されることを切望し、ご期待申し上げております。

特に、新潟市は環日本海圏域の拠点性強化という観点から、新潟駅連続立体交差事業、新潟空港滑走路の三〇〇〇メートル化、空港アクセスの整備、新潟中央環状道路及び日東道の早急な整備、上越新幹線超高速化、羽越線高速化、新潟港の港湾機能の強化など都市基盤整備事業の積極的な推進により、地域間の交流、経済の交流を活発化させて、私たちの新潟を全国に、そして世界に、どんどんアピールしていくことが大きな課題と思っております。

そんな思いもあり、私は早くから中国山東省の経済開放特区であり発展著しい青島（チンタオ）市との定期航空路開設に取り組み、昨年までに三回の相互乗り入れのチャーター便を就航し青島市との友好交流を築いてまいりました。

新潟から世界に発信する観光交流の拠点として、各方面の航空路のメニューを増やし、新潟空港が賑やかになることが、「元気な新潟づくり」のために大事なことではないかとも考えております。

そんな視点から、「政令市・新潟」の活力を創るために、私も、国土交通大臣政務官として、精一杯お手伝いさせて頂きたいと思っております。

年頭の会報に機会を戴き、このようなご挨拶となりましたが、青山同窓会の皆様は、グローバルに、ローカルに官・民に限らずあらゆる分野でご活躍されており、私にとって、心強い支えとなっております。

今年も会員皆様にお世話になりますが、私は常々、国を愛し、新潟を愛し、家族を愛し、そして友を愛し、美しい国、美しい新潟、美しい家族、美しい友情に結ばれ、私たちが安心して暮らせる社会を築くことが、政治の根本と思っております。

「新潟を元気に、日本の地方を元気に」の私の信念のために、ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げ、最後に会員皆様のご健勝、ご発展をご祈念し、新年のご挨拶とさせて頂きます。

新年のごあいさつ

衆議院議員　鷲尾　英一郎（103回）

今年も何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

さて、二〇〇六年を振り返りますと、様々な出来事がありました。まず、数十年ぶりに皇室に親王がお生まれになりました。天皇たる地位をどのように引き継いでいくのか、議論せねばならないことが山積していますが、悠仁親王の誕生は本当にうれしいことです。

海外に目を転じますと、イラク戦争は長期化、泥沼化し、戦争を主導したアメリカでは上院・下院とも与党共和党が敗北し、民主党が多数を占めました。早速イラク政策の見直しがなされています。それと同時に、日本が頼りにしていた北朝鮮政策についても（北風から太陽へ）見直しの気運が高まっております。イギリスでも人気を誇った労働党ブレア政権がイラク戦争のおかげでがけっぷちに立たされており、今後保守党に取って代わられると言われております。

両国ともに、大量破壊兵器については誤情報であったと認めており、この点日本では、まだ見解の修正がされていません。政府がイラクに自衛隊を派兵する際に大量破壊兵器の存在を大義名分にしたため、いまだ見解の修正がされておらず、結果として、アメリカへの追従のためだけに、今年七月までの派兵期間の延長がなされている状況です。

北朝鮮では核実験が行われました。日本でも核保有の議論がされつつあり、日本の安全保障環境は極度に悪化しております。北朝鮮にまつわるさまざまな問題については、拉致問題、人権侵害の問題など、解決に何の糸口も見出せません。

中国では日本での首相交代を受け、安倍政権になってから関係が改善しました。これは、中国の経済発展にとって日本が必要であることの証であるし、核実験に端を発する日本国内での核議論も影響をしていることと思われます。北朝鮮問題では、中国も主体的に関わり、6カ国協議が継続するよう、尽力しています。しかし、韓国では親北・反日政権が政権与党となっていて、相変わらず北朝鮮への資金援助事業が続けられており、アメリカ、中国を始め、世界から孤立しつつあります。

内政に目を転じますと、日本では、格差について容認するような政府与党側の発言が広まっておりますが、お隣のアメリカでは、富裕層三〇％の人間が国富の六〇％を所有し、中流は死んだといわれております。日本ではこのような状況は容認できるはずがありません。

一方で、少子化の状況は未だ改善せず、財政健全化の道のりも未だ遠く、光明すら見えない中で、国民の年金制度に対する不安感は拭いきれていません。また、教育基本法審議の過程で明らかになった、行政タウンミーティングに代表される税金の無駄遣いの実態には、改めて目を覆うものがあります。

政府はニート・フリーターの削減目標を掲げましたが、具体的、効果的政策についてはないというのが現状で、ニート・フリーター対策についても、相変わらず特別会計から税金の無駄遣いをし、箱モノを作っているのが現状です。

このような行政府・霞ヶ関官僚機構の思考体系を崩し、税金の無駄遣いを減らし、財政の健全化を図っていくためにも政権交代は必要です。それに加えて、自らの国家、社会に対する当事者意識、責任意識が希薄化しすぎた、日本国民の教育の根本的建て直しも必要ではないかと思っております。

あけましておめでとうございます。

青山同窓会の皆様には、日頃から大変お世話になっております。

新年のごあいさつ

新潟市長　篠田　昭（75回）

青山の皆さま、新年明けましておめでとうございます。

昨年十一月の新潟市長選挙では皆さま方から大変なご支援を賜り、再び新潟市長を務めさせていただくことになりました。深く感謝申し上げ、これからも新潟市の活性化と安心安全な暮らしを前進させるため全力を尽くしてまいります。

二〇〇七年は新潟市にとって歴史に残る年となります。昨年十月二十四日の閣議で「二〇〇七年に新潟市を政令指定都市とする」との決定をいただき、本州日本海側で初の政令市が誕生することが確定しました。早期の政令市移行を目指して、八十一万の大合併を後押ししていただいた市民の皆さま、そして青山の皆さまのご協力の賜物と感謝しております。

新潟市が目指す政令市像は、これまでの先輩政令市とはかなり異なっており、かつてない政令市をつくり出そうとしています。その基本方向は「東アジアの時代を切り開く日本海政令市」「農業者と生活者が恵み合う田園政令市」「市民と行政が協働のまちづくりを進める分権政令市」の三つです。

先の選挙では陣営として「政令市新潟マニフェスト」を市民にお示ししました。世代別・分野別の政策公約をきめ細かく作成するとともに、新潟市役所の組織・行政経営改革を進めることをお約束しました。

大変厳しい財政状況の中で政策公約を実行するには、さらなる行財政改革が欠かせないからです。幸い一期四年間で市役所改革は大きく前進し、外部評価もかなり高いものがいただけるようになりました。

昨年十月の東京紙の評価では、行政革新度総合ランキングで八百二都市中三十四位となり、市民参加度は二十位、透明度は十位との評価を得ました。

昨年の教育基本法改正の議論で最も重要であったと考えますのは、教育の責任は国にあり、第一義的には家庭が教育の根本であるとの認識である点です。

地域社会の緩慢な崩壊が続くなかで、家庭の教育能力は著しく低下しつつあります。その結果、親殺し、子殺し事件は枚挙に暇がなく、幼児虐待事件も増加の一途を辿っています。家庭は教育を学校に押し付ける側面があり、学校においても、家庭で教わるべき躾ができていない子どもたちによって教師の負担が過重になっている面があり、世間の学校教育批判と相俟って、教師が何を教えるべきなのか、分からなくなってしまっている部分があるのが現状です。

新年から大変重い挨拶になり恐縮ですが、これらを含めた諸課題に対し、付け焼刃ではなく、日本の国民のために誠心誠意、ひるむことなく取り組んでまいりたい所存です。筋道の通った見える政治を目指して青山同窓会の名に恥じること無きよう、丈夫魂を持って、青陵健児として頑張って参ります。

今年も宜しくご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

私たちが目指してきた「情報公開日本一」が視野に入ってきています。政令市への移行を機にさらに行政経営の品質を向上してまいりますので、今年もよろしくご助言・ご指導をお願いいたします。ありがとうございました。

平成 18 年度　青山同窓会総会

昨年七月十四日（金）、同窓会総会がホテル新潟を会場に開催されました。出席者六百五十名、昨年よりも四十名ほど増え、今年も盛大に会が行われました。

長谷川会長議長の元、総会の議事が進行。今年は、例年の会計の議事以外に会則の一部変更（広報委員会・総会実行員会の設置）が認められました。

懇親会では、篠田昭新潟市長、鷲尾英一郎衆議院議員の挨拶の後、近藤圓大先輩（38回）のお元気な乾杯で会がスタートしました。白井新実行委員長の「なるべく懇親の時間を長くもちましょう」という配慮で、挨拶も短めに、アトラクションも行わず、当日は絶好のビール日和でいつもよりもにぎやかに会が進んだようです。

ただ残念なのは、出席者六百五十名のうち、90回生以上（四十歳以下）の出席者がわずか十五名ということです。同窓会の今後を考えた時に、若い世代（？）の出席が待望されます。会に出席することで同窓会に新風を吹き込んで頂き、同窓会の発展また母校の発展に寄与できるのではないかと考えます。是非、みなさんで声を掛け合って、七月の総会の日は同期が集合する日と位置づけてはいかがでしょうか。

東京青山同窓会
平成十八年総会報告

東京青山同窓会事務局長
日下部　朋子（82回）

東京青山同窓会平成十八年度の総会はおよそ百名の参加者を得て、東京全日空ホテル（清田晋総支配人・82回）にて賑やかに開催されました。ここ数年の若手台頭の流れを引き継ぎ学生の参加者が十八名あり、その半数が女性とあって例年にも増して華やかさと若さが印象的な会となりました。

栗林貞一会長（59回）のご挨拶に始まり、総会議事は旧年度（平成十七年度）の会務報告、会計報告・新年度予算案をそれぞれ不肖日下部（82回）、佐藤茂会計幹事（77回）が述べ、無事承認されました。

引き続き新潟から遠路お越しの風間士郎青山同窓会副会長（64回）のご挨拶、石川朝洋教頭から母校の音信をご紹介いただき、間もなく厳しい冬を迎えるであろう新潟への思いに誘われ、一時、胸の中が温かなもので満たされました。新潟からは富山修一幹事長（75回）にもご出席いただき、また、篠田昭新潟市長（75回）からのメッセージも読み上げられ新潟の風と薫りを運んでいただきました。

以上第一部の司会は113回の滝沢渚さんと松澤みずほさん、続く第二部は同じく113回の関本幸太郎さんと、フレッシュトリオでの仕切りです。

第二部の懇親会は斎藤伸雄名誉会長（44回）の乾杯で幕を開けました。歓談中のPRタイムには、佐藤信秋氏（74回）が来年の国政選挙への挑戦の決意報告、小林史佳氏（101回）は津軽三味線奏者としてメジャーデビューの報告と東京でのコンサート告知を兼ねて一曲演奏を披露。新潟発の挑戦者として両氏とも同窓諸氏から温かな声援を贈られ、会場は一層和やかな空気に包まれました。

続く『出席者数コンテスト』は64回と113回がともに十名で一位、二位、59回が八名で三位と続き、壮年と学生に席巻された格好に。やむなく中間の青年層にもっと頑張りましょうという気持ち（皮肉？）を込めて、89回と90回の三名に特別賞が贈られました。次回はきっと出席者が倍増することでしょう（？）。それぞれ東京ではなかなか手に入らない銘柄の新潟のお酒と、採れたての新米コシヒカリが贈られました。

時間はあっという間に過ぎ、島津孝氏（84回）のリードで旧制校歌、学生諸君のリードで新制校歌と丈夫斉唱、星野詔英氏（84回）のエールで会場は沸騰。池一幹事長（74回）の感謝と再会を期する閉会の辞にて締められました。

例年通りの二次会も四十名近い参加者を得て、老若男女縦横無尽に杯を酌み交わし、秋の夜長を楽しみました。

第八回
関西青山同窓会に出席して

関西青山同窓会事務局
松本　和彦（83回）

去る十一月二十五日（土）、一昨年まで会場として使用していた大阪東急ホテルの閉館に伴い今回から、大阪新阪急ホテルに場所を変えて、「第八回・関西青山同窓会」が開催されました。例年より取り組みが遅れ、また京都大学や京都府立大学などの大学祭と重なってしまい、現役大学生の参加人数がいつもの年より激減してしまいました。しかし参加者は四〇名弱だったとはいえ、参加者各位の母校を思う気持ちは強く、盛況の内に開催することができました。

開会の挨拶は、恒例により関西青山同窓会長の佐藤幸治氏（64回・京都大学名誉教授・近畿大学法科大学院教授）のお話から始まった。「憲法」の重鎮として例年は政治や憲法のお話が多かったのですが、今年は人生における、一番多感な高校時代に感化をうけた恩師についての思い出、特に英語の志賀先生や国語の渡辺先生などといった懐かしい個人のお名前を出されて、高校時代の恩師の存在や考え方に、現在どれだけ影響を受けているかなどのお話をされました。佐藤会長が大きな役割を担われた司法制度改革のような時の話題を生で聞けるのも、同窓会ならではですが、こうした懐かしい恩師のお話をきけるのも、また同窓会があるからこそのおかげだと思います。

このたびは新潟より風間士郎副会長（64回）、石田瑞穂副会長（67回）をお迎えし、理数科クラスが増やされるなどの現在の母校の近況や新潟市や新潟県での母校OBの活躍などを拝聴し、あらためて母校の人材の多様さやユニークさを感じさせられました。また65回卒の高橋貞夫氏の日本の城についてのお話といった諸先輩方のスピーチや後輩諸君の、例えば成澤良氏（105回）の在校当時の野球部の思い出や、金子光佑氏（106回）のフランス留学からの帰国前後の近況など、その内容も多肢にわたるものでした。

会場が変わったせいもあるのか、今回の同窓会は例年以上に出席者各位のスピーチや思い出話を、他の方々も静かに味わい深く聞いておられ、一つ一つのお話がとても記憶に残るものとなりました。こういう同窓会の形式も思い出に残り、これはこれでまたいい同窓会だなと思った次第です。現役大学生の出席が少なかったため、「ますらお」のエールをきったのは83回卒で、在学当時は野球部で活躍した伊藤洋介君。彼が年齢を感じさせない大きな声で音頭をとってくれました。この時ばかりは参加者一同、高校時代に若返ったつもりで、みな声を張り上げて、懐かしの校歌やますらおを歌っておりました。そして66回卒で副会長を務める渡辺操氏のご挨拶でもって、会は閉じられ、最後は全員前に集まり恒例である記念の写真撮影と成りました。

このように今回も無事に関西で同窓会を開催することができました。奈良や京都といったいにしえの都を抱え、関東圏にはない独特の言葉や文化を持つ関西という土地で、わが青山同窓生の多くの方々が活躍されるのは、卒業生の一人として誇りに思います。また受験面でも、平成に入るまでは、現役大学生が京都以西の学校を受験することがほとんどなかったことを思えば、大阪大や神戸大などといった京都以西の国公立大学を受験する学生も毎年必ずでてくるようになり、関西在住者としては喜ばしい限りです。

また石田副会長の母校の近況報告にもありましたが、野球部やラグビー部に有力な新人が入ってきたとのこと。現役の後輩諸君が活躍し、花園ラグビー場や甲子園球場に出場するようだったら、関西同窓会一同、大応援をしようと、今から心待ちにしております。

大阪暮らしがもう三十年近くとなり、新潟弁がしゃべれなくなった私ですが、毎年この関西青山同窓会を開催することを楽しみにしております。関西在住の方ばかりでなく、大学を関西で過ごした方、転勤などで関西に在住したことがあるという方、また出張などでたまたま関西に来ているという方、どなたでも構いません。卒業生ならばどしどしこの関西青山同窓会に参加されて、関西での楽しい思い出に浸ってみませんか。

同窓生訪問

蒲原宏先生（48回）を訪ねて

（会報編集委員）坂井　奈津子（96回）

「知的好奇心を持つこと。」

お話の中で度々出てきたこの言葉が、先生の幅広い活動の源になっておられるのだな、と感じました。

県立がんセンター副院長を退任され十八年ほど経った現在も、毎日、好きなことにお忙しい日々を過ごされていらっしゃるそうです。

主に取り組まれているのが、新潟の医学史の研究で、図書館等での文献調査はもちろん、現地にも足を運んで実地調査をし、最近も海外にまで調査のために行かれたそうです。

また、句集を何冊も出版されている俳句は、学生時代から始められたのですが、そもそものきっかけが旧制新潟中学校の国語の先生に、アララギ派の高名な阿部利三郎先生がいらしたそうです。最初からいい先生について学んだことが良かったとおっしゃっていました。

先生がメモを書き付けるために肌身離さず持ち歩いている手帳は、既に二百冊以上にも。ちらりと拝見させて頂きましたが、びっしりとメモが書き込まれていました。

先生から物事を続けていくための核を教えていただきました。

一、続けていくための体力。

二、いいリーダーを見つけ、例え自分より年少であったとしても、教えを請うという謙虚な気持ちを持つこと。

三、集めた記録を分類、整理して、まとめていくこと。

そして、後輩に伝えたいメッセージとして、

「官職についても、その虚名に溺れない事。職を退いた後でも、この人ならでは、というものを持っているような魅力的な人間であってほしい。」

今回、先生から貴重な話をたくさん伺い、全部を紹介出来ないことが残念です。

先生は蒲原浄光寺の跡継ぎだったのに、戦時中ということもあり、お父様が、理系の大学に進めば卒業するまで召集猶予があるとの情報で、息子を戦死させたくない親心で医師への道を勧められたこと。

海軍の軍医として戦地に赴いたこと。

戦後の物資の乏しい中で、苦労するのが当たり前のことだと思い、勉学を続けてきたこと。

同期会報告

青山四十六回生同期会の幕引きと回顧

横山　隆二（46回）

満八十五歳の我期最後の同期会は十一月十八日例年通り白山会館で開催された。階段の手すりにつかまったり杖をついて上がってくる老友、案外スタスタと近づいてくる友等、十七名。先着の人と手を握り肩を叩きあへば、難聴のせいもあって声は若く大きくすぐ昔の顔に変わってくる。

お孫さんの話や、若い頃には演劇をされていて、舞台に立っていたこと等々。先生の笑いを交えた流暢なお話しぶりに、あっという間に時間が過ぎていきました。

48回卒の方々は、若いときに戦死された方もあり、現在も健在である方が数少なくなってきたそうです。そのような中、先生がお元気でいらっしゃるのは、お酒は飲まない、タバコは吸わない、株にも手を出さない（膝株だけは二つ持ってられるそうですが・・・笑）という、健康的なご生活と、何よりも、知的好奇心を持ち続け、趣味に打ち込んでいられるからなのだろうと、颯爽と歩き去っていく姿をお見送りしながら感じました。

最終ということで白山神社に昇殿。小林宮司によって亡き友の鎮魂と生存する諸兄の無事息災の祈願をして頂き、一人一人玉串を捧げて祈念する。

開会にあたり幹事より五十年以上にも及んだ同期会幕引きの挨拶と近況集の配付。遠来の富所、下、両君にお土産の新潟銘酒を、また十回出席賞を江口君に夫々贈呈、神酒で乾盃して会食懇談に入る。

あとはもういつも通りの昔話や近況や病気などの話、馬場君から拉致の苦労話などと話に花が咲く。最後に校歌と青山を高唱、記念写真を撮り四六会万歳を三唱し、卒業六十七年目にして会合を終了したのであった。これからは少人数の会合、交信などで交流して頂ければと幹事よりお願いして解散をした次第。

顧みると何故か、いつの間にか幹事になって五十年にもなる。保管してある大量の記録の中で一番古いのは昭和三十五年の「同期会ニュース」と名簿。当時母校に在職した故高橋兄と私の連名で発行されている。この年は二十九年に焼失した校舎の竣工式の年に当るが、数年間の募金活動で同期の交流が盛んになったのであろう。当時の寄付者芳名録や収支報告も残って

いる。

その後は故鶴巻兄が中心となって職場別の当番制で開催されていたがその頃の資料はない。昭和五十五年頃から金子政太郎君が事務局を引受けてくれ、ワープロを使って活発に会合を推進し近況集を配付して運営が活発になった。ホテル、温泉、料亭等も使用し、案内葉書も百三十名に郵送した程であった。其の後、金子君が病に倒れ、高橋兄の急死のあとを鍵冨君にお願いして何とか継続したが、事務局を熊谷君にお願いした平成九年から再び活発となり、その年は案内一〇九名、回答八十五名で立派な近況集を発行でき、以後毎年これを継続してきた。

しかし寄る年波と共に逝去者や無回答者が増加し、出席者も減少し、案内も三十名程を省略して市内近郊の人々に縮小し、出席者も十五名以下となって、ついに幕を引くことを決意したのであった。卒業名簿は百九十三名、平成十四年のリストでは二百四十名であるが今では逝去者百六十名、完全に近況が明瞭な友は四十名、多少不明の友三十名余りというのが現状である。

会報で本文を読んで下さった同期の諸兄よ。友の多くは病を持ったり入院し、或いは伴侶を失い、苦労多き人生を送っている方も多い。ご希望があれば今回の近況集と写真をお送り致しますので旧友と少しでも交流を持ち、ひと時でも潤いを感じて頂ければと心から願っています。長年にわたる御協力、御芳情に深く感謝をして筆をおきます。

※事務局より…46回幹事の横山様から昭和十四年の卒業生一覧表他貴重な資料をいただきました。ありがとうございました。

五年に一度の玲瓏会同期会

細貝　実（58回）

第58期卒業生の同期会“玲瓏会”の名は、校歌“玲瓏の天、仰ぐ時”から名付けたものです。

新潟県内に百二十二名、東京を主とした県外八十四名がいます。夫々年一回の会合を開いています。新潟は五十八期に因んで曜日に関係なく五月十八日に新潟市で開催、東京は十一月下旬の金曜日に夫々やることになっています。

そこで、みんなが六十五歳になった時、五年に一度新潟と東京合同で新潟の温泉で集ろうと提案して、平成八年第一回村杉温泉・長生館、平成十三年第二回越後湯沢温泉・湯沢グランドホテル、平成十八年は大湯温泉・ゆの宿峡里で開催の運びとなりました。

新潟と東京で五年毎に顔を合わせると言うよろこび、秋の夜長を話し合う楽しみ、越後の名刹開山堂参拝、翌朝は錦綾なす紅葉の奥只見湖を船上から観光とプラスワンの旅を三十五名が満喫しました。

次は五年後の平成二十三年十月です。一泊でどこかいい所があれば教えて下さい。〝八十歳の傘寿〟を大いに盛り上げ、健康で百歳迄この会を続け度いと思っています。

新潟幹事　青柳廣士　加藤髙弘
東京幹事　北井一郎　山谷皓栄
細貝　実

青山六三会　古希を祝う会

十月十一日（水）～十二日（木）

赤羽　良樹（63回）

古希。還暦の時もそうだったが、どうも実感がない。でも改めて考えるとやはりめでたい、うれしい、有り難いと思う。

今回は当間高原ベルナティオに設営した。最初四十八名の参加申し込みがあったが、「体調を崩した…」「本人は元気だが、近親者に異変が…」等々と続々キャンセルが出て結局三十二名。大赤字になるところを何とかギリギリの線まで持ってきた山本弘司氏のご苦心、交渉力に感謝脱帽。

新潟、新宿からの直行バス、マイカー、JRで越後湯沢へ。そこからシャトルバス利用とそれぞれの方法で六時の開宴までにホテルへ集合した。

開宴前に恒例の記念写真、毎回和田和男氏に重い機材を持ってきてもらいご苦労願っている。十一人掛けの大テーブルが四つ。女性の参加が丁度四人で、自由席だったのだが、気をきかせて（？）一人づつ別れて着席して下さったので各テーブル一層話が盛り上がったはず。

宴半ばで前回同様山田豊君のフルート演奏。「クラッシックの楽器演奏とは六三会レベル高いね！」の声。これも前回好評の柏正平君の正調民謡。山崎十士松君の「四季の新潟」、私も「女ひとり」を歌う…最後は全員起立して新旧校歌を歌ってお開きとなる。ソングリーダーを勤めた湯浅君、江口先生、ありがとうございました。

翌日はゴルフ組、秋山郷半日巡りコース、ブナ林散策コースと別れ、それぞれ秋の一日を楽しみました。

それにしても三十二名とは少

し淋しい。そういう年廻りになってきたことはいえるが、同年の中央高校の「古希の会」は四倍の百名以上集ったという話。女性の平均寿命とは差をつけられているが、恐るべし女性パワー。

次の節目は「卒業五十五年」そして「喜寿」となるか。百％健康で出席する事を目標としてがんばりましょう。皆さんお元気で！

青山68会（68回生）の活動紹介

田中　宣男（68回）

平成十六年二月の青山同窓会新年会帰り、いつもの如く古町へ。池主、若松、岩原、田中（宣）の面々は些か酒に酔い話が弾んでいた。その時誰かが言った「俺らも今年で六十三歳。少しは世の為になることをやったらどうだ」と。そうだ、そうだ・・と話は一気に盛り上がり「それは文化だ・・芸術だ・・」と発展して作品展の開催が即決定。翌日からそれぞれの得意分野で準備にかかり、其の年の九月に「第一回青山68会展」が開催された。それから三年目の平成十八年九月「第三回青山68会展」を盛会に終えることが出来てホットしているところです。

68回生と其の家族三十五名の出展で約七十点の作品は年々レベルが上がり、世間の評価も定着してきた感があります。其の作品は絵画、書、写真、陶芸、工芸から帆船の模型、ライブ録音のCD制作まで何でもありです。会場には毎回出展頂いている長谷川同窓会長をはじめ、九十歳を超えられて益々お元気な恩師阿部正先生も駆けつけ我々も大いに励まされ元気を頂きました。新聞、テレビの取材には渡辺（洋子）、若松、鈴木（喜）が対応し、其のコメントは中々堂に入ったものでした。

今年の九月も開催予定ですので気楽にのぞきに来てください。

その作品展開催中に「第四十二回青山68ゴルフ大会」が行われました。昭和六十一年九月の第一回大会以来、春は高崎、秋は新潟と延々二十年余を経て第四十二回大会を迎えたのです。

今までの出場者は延べ八百七十五名、参加者は七十二名で68回生の二割強になります。

会を長きにわたり支えてきた歴代の幹事、渡辺（泰）、今野、鈴木（裕）、近藤（義）のもとで完璧なデーターが記録として残り、村山（隆）がそのデーターを整理しまとめました。参加者全員の記録、例えば出場数、合計打数、優勝入賞回数、BG，BB，DC，NPなどの記録が青山68会HPから閲覧出来ます。

その他にも様々な活動を行っています。歯科医師会美術部で活躍してきた池主塾頭指導の下で「68画塾」、紫雲ゴルフ倶楽部元シニアチャンピオン関根（紀）指導で「68ゴルフ教室」、高校教員時代佐渡での単身赴任で料理に目覚め、その包丁さばきには定評のある岡庭指導の「68料理教室」、江戸千家免許皆伝で歌の名手、真野（義）指導「68茶会」等々です。この会の特徴は外来講師にお願いせずに68回生の仲間で全てまかなっていることが自慢です。東京では渡辺（千）、村山幹事でゴルフの月例会が行われております。

また、最近はユニークな活躍をしている68回生の子供さんを応援しております。中村（輝）の次男で若手映画監督「中村高寛」。昨年、ドキュメンタル映画「ヨコハマメリー」で話題になりました。次回作に期待しています。更には渋谷（暁子）の長男でシャンソン歌手「渋谷文太郎」。百八十センチを超える長身とその甘いマスクは魅力的です。

青山69回 卒業四十五周年記念 軽井沢大会

大森　ゆかり（69回）

早いもので新潟高校を卒業してもう四十五年もたってしまいました。

五年ごとに開催している私達69回の同期会が、今回は会場を湯沢温泉から軽井沢プリンスホテルに移し、九月十四日午後六時から開かれました。リゾート地でもあり、家族連れも可としましたが、夫婦組は数組で総参加数四十六名でした。横山先生もお元気なお姿を見せて下さいました。いつものように石本幹

事長の挨拶で始まり最初のうちは、会に初参加という方も何人かおられたので、〝あの人ダーレ〟の声も少々ありましたが五分もしないうちに昔の学生時代に戻ってしまいました。なんといっても会を盛り上げたものは鈴木君が持参した高校時代のマラソン大会などのビデオでした。走っている人、沿道で応援している人「あ、あ、あれオレ、ああ、あれアイツ」等など。なんとみんな可愛いかったことでしょうか。そのほか両川君の先生の物まね。いつもながらの名演技で、渡辺勉先生や斎川先生の物まねは当時を思い出してみんな爆笑でした。また、田巻君は返信ハガキできた近況報告をまとめて校歌、応援歌といっしょに冊子にしてくださいました。とても良い記念になります。会の最後はいつものように〝青山〟を声高らかに合唱してお開きになりました。そのあとも会場を移してほとんどの人が参加の二次会があり夜がふけるまで話し込みました。

追記：同期会当日と次の日にゴルフ組がプレーをしました。第一日目はものすごい霧で目の前が真っ白で何も見えないという状況の中で三組のプレーでした。ティーグランドに、打つ方向を示す矢印だけがあるのです。無我夢中、もとい無我霧中で打ちみんな立派？な成績を収めました。二日目は秋晴れで、スコアの言い訳も通用しないようなお天気でした。皆、後姿は若々しいのですが、さすが二日間のプレーは疲れました。また、五年後皆様にお目にかかるのを楽しみにして帰って来ました。

74回生卒業四十周年同期会

相場　文夫（74回）

お盆休みの八月十四日（月）、新潟東映ホテルにて午後三時より六時まで百五名（女性十七名）の参加で盛大に開催いたしました。

宮地（数学）、奈良（物理）、山岸（英語）先生も元気に参加していただき、卒業後四十年ぶりの再会もあり話は尽きませんでした。

冒頭に逝去された十六名に黙祷をささげ、次期参議院自民党比例代表公認候補「佐藤信秋」君の挨拶ではアダ名の「チーボー」の自己紹介で始まり会場は拍手と笑いで包まれました。

宮地先生の乾杯で始まり、後は会話と笑い声で司会者のマイクも用をなさなくなり、司会の仕事は最後の締めの合図まで無し。

高校時代の思い出、他の同級生の動向、自分の近況報告、子供の独立、孫の自慢、定年後の趣味等たいしたことのない話でも会話は途絶えることなく延々と続きました。

遠くはドイツから水島君、札幌から島津さんと県外より三十二名も参加がありました。

住所不明者も当日判明分に後日の連絡で二十名（中国在住者二名含）ほど判りました。

一九七六年（昭和五十一年）卒業 84回生 同期会

宮崎　清也（84回）

二〇〇六年（平成十八年）八月十二日に一九七六年卒業生の第84期同期会を開催しました。二〇〇一年正月、二〇〇四年正月に続き、三回目の開催となります。会場の新潟グランドホテルには百十名が集まり、六名の先生方も出席くださりました。

開催案内は新潟グランドホテルにお願いし、幹事業務の低減を図りました。今回は名簿整備が進み、連絡がつかなかった同期生は五十四名に減少しました。出欠確認も郵便局振込みにて行いました。容貌経年変化に対応するためには名札は必須アイテムです。同窓会事務局外山さんの勧めで、受付にて同窓会謹製名札に自筆する方法としました。幹事低業務にての開催パターンも出来上がりました。

開催当日は、猛暑の中でありましたが、午後二時には無事開会できました。一組から十組の卒業時編成で着席です。星先生には、祝辞を頂戴しました。星先生の名調子は素晴らしいものであり、爆笑の中でも考え深く拝聴し、在学当時の日本史の授業を思い出しました。

その後、クラス別に同期生が登壇しました。壇上に立つ同期諸君に対して、「女子は昔の面影があるのに、男子は変わりすぎ！誰がダレだかわからない！！」という嬌声があがり、大いに盛り上がりました。

午後四時ごろには、同じ会場のまま二次会に突入。

このタイミングで、入学一年生時のクラス編成で着席しなおしました。これは新たな再会を呼びました。同じ会場にいても、気が付かなかったということがあるのですね。

丈夫斉唱の後、午後七時に散会しました。出し物も無いままでしたが、ひたすら会話を続けた五時間。喉も嗄れ、酔いも回りきったまま、三次会会場へと、消えていきました。何時までもロビーで話しこむ二人がいたかどうかは・・・わかりません。

我々は、来年、五十歳になります。育児が終わりを迎えつつ、親の介護に向かう年頃です。また、残念ながら、毎年、同期生の訃報に接するようになりました。次回開催時は、何が起きているか判りません。人生の中の僅かな瞬間です。少しの無理を押してでも、会える時には会っておきたいものです。

次回の同期会開催は、二〇〇八年八月十六日です。よろしく御参集ください。

Web同期会は http://groups.yahoo.co.jp/group/aoyama84kai/

通信制コーナー

閉課程に高まる愛情の念
（教育愛に育まれた四年間）

今井　栄作（通24回）

昨年十一月実施の一連の閉課程記念事業から、早くも一ヶ年が経過しました。母校の開設当初から現在に至るその素晴しい伝統の歴史を顧みて万感胸に迫る思いで惜別の会で涙を堪えながら、各回卒代表五人の中の一人として思い出を語らせていただきました

昭和五十三年四月、一九三名の新入生が入学し、代表で宣誓をやり通教生としてスタートしました。当時の学校は、前年度初めて百余名の卒業生を輩出、待望の鉄筋コンクリートの通信棟が竣工した時で、活気に満ちた輝かしい学習環境との印象が強く感じられました。その恵まれた学校で四年間学び卒業することができました。卒業は、自分の資質と根性ではそれまで考えられない画期的な出来事でした。そのうえ卒業証書にも優る価値有る「人間教育」を教育愛に育まれた、伝統化した学校環境の中で受けたことで教育愛が人間を養い育てる事を自己の心と体で体験しました。母校は我が人生に宝を与えてくれたのです。それは次に紹介する入学動機の悲壮的に決意した仕事の壁を破る答えでした。

義務教育時代は、真剣に勉強した記憶はありません。苦手の科目を努力し克服する勇気も根性も無い四十男が、嫌いな勉強を始める決心をしたのは、仕事の壁に突き当り悩み抜いたあげくからでした。当時交通安全指導員を命じられ、四～五年素人なりにも研修会や警察署交通課等の指導助言を受けそれなりに務めて来たのですが、年々仕事内容が高度化し、幼児から児童、高齢者に至るまで幅広く係る内に、能力不足を痛感する出来事に遭遇した事からです。それゆえ学習に適応できるか、大きな不安を抱えての入学でした。学習面では特に英語、数学は、致命的なレベルでしたから、悲壮感を伴う状態でした。

度重なるスクーリング、生徒会行事や学校行事に出席することで、働きながら同じ目的で、通学する多くの学友の居ることに勇気づけられました。年代の広い通信独特の雰囲気の中で年代を越えた交流ができ、学生として次第に適応できる様になりました。しかし、問題はテストでした。苦手科目で赤点をもらい厳しさを実感した時に、個別指導を受けることを勧められました。勇気を出し受講した、生まれて初めての個別指導は緊張で始まりました。生徒の人格を尊重しながら考えられる教示方法だったのでした。数回の受講で先生の教えの素晴しさだけでなく、人格に信頼を深め、覚える自信と勇気を与えてもらったのでした。科目終了時には英語、数学は人並みレベルに近づけました。生まれて初めて味わった勉強を克服した達成感でした。それは一年次の出来事ですが、三年の秋頃でした。スクーリング受講中にハット気づいたのが「愛」の発見で、感動的な瞬間でした。先生と生徒が一体感のスクーリング、学校行事や生徒会行事に心をひとつに共に汗を流し喜びを分かち合うその姿、レポートに添えられた一言のメッセージ等、その中に光る何かが秘められている、それが「教育愛」だと発見できたのです。それは開設時の山田源行先生の熱い教育愛を原点に脈々と受け継がれ、大きく育まれた通信制の伝統の教育者の人間愛が自学自習の制約の多い通信制システムを機能させているのだ。多くの関係者が愛情に育まれ、大きな喜びであり、感謝しても尽きないものがある。愛情の念深まり、生涯不滅であり、母校新潟高等学校通信制の光は永遠である。

OB会報告

フェンシング部 OB懇親会報告

石原　基規（88回）

去る九月二十三日（土）、古町安兵衛にてフェンシング部OB懇親会を開催しました。58回卒の先輩から97回卒の若手まで十八名ほど集まり、旧交を温めました。

丁度釧路から帰郷しておられた、83回卒の小林聡史先輩にお会いでき、学生時代に合宿で諸先輩にしごかれた事を、昨日のことのように思い浮かべました。体力のない一年のときに、体が千切れるのではないかと思うほど、いやいっそ千切れたほうがどんなに楽かと思いながら、基礎練習に打ち込んみました。でも練習が終わると、先輩達から安藤商店のパンプルを差し入れてもらい、色々なお話を伺うことができました。パンプルの炭酸のきつさは、なんともいえない青春の味です。先輩たちに可愛がってもらい、本当に楽しいときを過ごすことができました。おかげで私たち前後の世代の結束は特に強いと、顧問だった先生たちからもいわれます。

今回ＰＴＡ会長の遠藤先輩（87回卒）が、中学生になるお嬢さんの新体操北信越大会の試合に急遽付き添わなければならないということで、おいでになれなかったのは残念でした。ご存知の方も多いと思われますが、新体操をされている遠藤さんのお嬢さんは、全中で優勝され、将来オリンピックを嘱望されています。また、新潟高校に在籍される上のお嬢さんはまだ二年生にもかかわらず、インタ

ーハイのフェンシングエペ競技で、三位に入賞されました。遠藤さん自身も現役時代、同じインターハイのエペ競技で二位になられていますからまさに親子鷹といえるでしょう。

今回から多忙の遠藤先輩に代わって、懇親会の幹事をおおせつかりましたが、色々行き届かないところもありました。次回からもっとスムーズに進めることができるよう、精進しようと思います。

山岳部現役・OB交流会

曽田　修吉（76回）

平成十八年九月九日（土）・十日（日）巻機山で山岳部の現役とOBの交流会が行われました。この交流会は、毎年九月初旬に巻機山麓の山小屋で行われていますが、現役高校生は三年生の引退山行として巻機山に登り、OBも東京、新潟から駆けつけて、ある人は米子沢を登り、ある人は尾根道を登り、それぞれの思いで山を楽しんでいます。

例年、この時期は雨に降られる事が多いのですが、今年は天候に恵まれ絶好の登山日和となりました。OBも東京組は水野先輩（72回）他、我々八名でしたが新潟からは元顧問の飯塚先生、石田前OB会長（67回）、馬場現会長（74回）はじめ多数集まりました。OBの山行は九日でしたが七十七歳になられた飯塚先生も元気に私達と一緒に尾根組で山登りを楽しまれました。

交流会は現役にとっては三年生の追い出し会、OBにとっては現役の激励会を兼ねていて、夕食後、十五歳の高校一年生との年齢差六十歳を超える老・壮・青年が山小屋に集いました。

参加者全員で自己紹介をしながら、現役高校生は山への想い、進路や希望を熱く語り、浪人生、大学生は現況を語り、顧問の先生方は教育について語り、老・壮年は“古き良き時代”を思い出しながら人生を語り、話は多いに盛り上がりました。

また、山岳部の創生期のOBでご指導戴いた小林光衛先輩（63回）が昨年亡くなられた事から新潟高校山岳部OBと中央高校山岳部OG有志による「小林光衛先生追悼登山隊」が結成され昨年十一月にヒマラヤ遠征を実施致しました。当日、その壮行会も行われ登山隊長の加藤先輩（70回）から壮大な計画概要、抱負が披露されました。

時間が経過するのも忘れ、楽しい一夜を過ごしましたが、現役は翌朝四時に起床して元気に巻機山に挑んでいきました。

六十歳以上も年齢の離れた先輩後輩が一緒に山を語るというのは本当に素晴らしい事です。また、来年も再来年も多くの現役、OBが参加して楽しい交流会が続けられように期待しています。

青山水友会のお泊り総会

江口　良助（61回）

一昨年の総会懇親会での席上、もっと昔のようにOBと現役の人達が深い絆でむすばれるような関係をつくれないものか等々の話の中で、関川村の平田大六（60回）村長が「よし、俺の村で合宿、総会をやろう、面倒を見るから」の一言で決定。途中、いろいろ村長にお手数をかけてしまいましたが、昨年の八月三日～五日の合宿、五日総会の日取りが決まり無事、待望の開催にこぎつけることができた。

そのときの様子を少し…。

① プールに来ていた子供達と県高の生徒達の間にすばらしいコミュニケーションが生まれ、大きな収かく。

② 恒例の現役とのレースで往年の迷選手が女生徒に負け、プライドを傷つけられたOBは大ショック、楽しい出来ごと。

③ 流しそうめん、米沢牛のバーベキューなどのもてなしに生徒達は大満足。

④ 来年もここでやりたいという生徒達のコメントにOB達も大満足。

⑤ 「丈夫」の大合唱後、バスで帰途につく後輩達に手をふるOB達の姿が印象的。

⑥ 若手OBが近くの大石川に夕食のおかずにとカジカ取りに出かけ、何と四十匹余りゲット。それを唐揚げにして、地元の大洋盛、〆張鶴などで舌づつみ、来年もここでやるようであれば釣り名人、松木保（84回）君がキス百匹持参との約束。

⑦ 突然現われ出た平田大六一座の勘太郎月夜唄に合わせた奇妙な踊りにかい間見た村長のかくし芸に抱腹絶倒。延々続いた大懇親会も十時過ぎにようやくお開き、大変楽しい夕べであった。

後日、村長から今回の県高水泳部の合宿は村でも大変好評で来年も、ぜひ、お出願いたいという、うれしい便りを戴き、早速、水泳部の顧問の先生に報告。すばらしい後輩を持った喜びに計画したOB達は大感激。来年も、再来年も、小さくともキラリと光る関川村での合宿が恒例となって欲しいと願いながら、活動報告といたします。

見事な準優勝!! 06年県総体・男子バスケットボール部

青山バスケットボールクラブ会長　和澄　孝男（83回）

昨年の夏は、OB達にとっても熱い夏となった。新発田地区で開催された県総体のバスケットボール競技会では、新潟高校（男子）の現役の活躍にとりわけ注目が集まった。

事実上三年生の最後の公式戦となるこの大会には、県内九十九校が登録参加し、新潟高校は第三シードの組合せで大会に臨んだ。選手の大型化やスポーツ推薦枠での有望選手の確保が可能になった時代の中で、小柄な新潟高校の戦いぶりは多くの観客の目をひきつけた。コートいっぱいを走り回り、リバウンドや

ルーズボールに執拗に喰らいつく。平均身長の低さを運動量とチームプレーで補う試合運びはバスケットボールを知る者をうならせるものがあった。順調に勝ち上がった最終日、準決勝の対戦相手は、冬の新人大会で同じ準決勝で敗れた長岡高校となった。彼らにとっての当面の宿敵である。第一ピリオド二十九－十九でスタートしたものの、第二ピリオドで二点差にまでつめられて前半を終了。身長差で勝る長岡は、後半で徐々に実力を発揮し始めシーソーゲームのまま最終の第四ピリオドの戦いとなった。激しいディフェンスでのぶつかり合いをしながら双方とも得点が伸びないまま、新潟高校はわずか三点の僅差で勝利を手にした。この試合は、多くの観客や大会関係者からも賛辞をいただくほどの素晴らしい試合となった。正に、〝観る者を魅了した高校生らしいゲーム〟であったと褒め称えたい。決勝では、王者新潟商業に敗れたものの見事な準優勝と誇りたい。また、今回は男子バスケ部に焦点をあてたが、女子バスケ部も健在で今大会では二回戦で僅差の敗退であったが、懸命に練習に励む姿があることもこの紙面をかりてご紹介させていただきたい。

バーベキュー大会
青山バドミントンクラブ

北村　誠作（72回）

去る九月九日（土）現役、高校生を招いてバーベキュー大会を開催した。

ＯＢと現役の高校生が交流する場として毎年行っており、定着している。

青空の下で鉄板や網、大量の肉それに飲み物を用意して参加者を待った。当日は天気も良く暑い日であったが、練習のあとで御腹がすいていたのか用意した飲み物も肉もみるみるうちに平らげて、若い人達の健康的な胃袋を見せ付けられた思いがした。

ＯＢの人と現役との交流の場では、そのむかし高校生だった時代のことを語り、懐かしんでいたＯＢの人や、それを物珍しそうに聞く高校生やら様々な話が飛び交っていた。高校時代は、同年代の人と話をする機会はたくさんあるが、年上の社会人と話をすることは少なく、新たな体験をしてもらえたのかなと思っている。

新潟高校は、ほとんどの生徒が進学を目指していて、クラブ活動も二年生でやめている。バドミントンの練習期間が短く、とくに高校に入ってからクラブ活動を始めた選手は、体が出来てきて「さあ、これから」という時にやめなければならず、ちょっと可哀想な気がした。

顧問の先生達にも参加していただき、たいへん有意義な交流会であった。

その場でＯＢと現役生は同じバドミントン部オリジナルのＴシャツを作ることが決まり今年の納涼会にはそれを着て出席することになった。

五五回から百十二回まで
青山柔道部ＯＢ会総会報告

立川　克雄（72回）

平成十八年十一月十八日（土）、恒例の総会が昨年と同様の東堀ウィズビル「金城閣」で行われた。

出席者は、母校柔道部の顧問の加藤英一先生、笹口勝先生（佐々木睦夫先生は、講道館杯全日本柔道体重別選手権のため欠席、来年は万難を配して出席とのこと）、本部同窓会からは石田瑞穂副会長（67回）、東京青山柔道部ＯＢ会からは佐藤信秋会長（74回）、福田満副会長（55回）を含め、55回から112回までの総勢三十七人の参加を得て盛大に行われた。

以前は、青山柔道部後援会として、主に現役選手の援助を中心として活動していましたが、ＯＢの親睦も大切ということで発展的に名称を変えております。要は、後輩を応援しつつＯＢ同士、少なくとも年に一回は親睦を深めるということです。

開会の挨拶の後、佐藤信秋東京ＯＢ会長の挨拶、同窓会本部から石田副会長の挨拶、加藤先生から母校現役選手の活躍と、兵庫国体柔道成年女子の部に出場した美濃川理矢子選手（110回）をはじめＯＢの活躍も報告された。定例の会計報告が終わった後、丸山澄夫（73回）幹事から今年七月の参議院選比例代表に出馬が予定されている佐藤信秋東京ＯＢ会長（昨年七月まで国土交通省事務次官・74回）を青山柔道部ＯＢ会としての推薦の提案がだされ、満場一致で決定された。青山の心意気で美しい郷土を作ってくれるものと大いに期待するところであります。ここで第一部の総会は拍手を持って終了した。

第二部の懇親会は結城俊郎前会長（62回）の乾杯の音頭ではじまった。年代は違っても、また初対面であっても、青山の柔道場で畳をなめて稽古に励んだことには変わりのない仲間、大いに飲み、語った。あっという間の二時間半。村田紀夫幹事（70回）の音頭で柔道部歌の斉唱、桜井競幹事（62回）の閉会の挨拶、相沢副会長（78回）の閉会宣言で次の再会を誓って総会・懇親会は終了した。

追伸　二次会は学校町の「佐和村」で二十人が気炎を上げたようである。靴の間違い、帽子、杖の忘れ物も無事持ち主に戻ったと電話を頂きほっとしたと同時に次年度への課題とした次第である。

東京青山柔道部ＯＢ会総会報告

平成十八年十一月七日（火）、恒例の総会が東京駅大丸デパート「ルビーホール」で行われた。参加者は若いＯＢも増え二十人を超える大盛況であった。詳細は東京青山同窓会報をご覧願いたい。

寄稿

第二十二回 青山ゴルフ会

星野　雅博（75回）

秋分の日に続く秋晴れ、快晴の阿賀高原ゴルフ倶楽部に青山OB、OG総勢四十名が打ち揃い（OGは二名）、九月二十四日第二十二回青山ゴルフ会が盛大に開催されました。49期の長老から99期の若手まで文字通り老いも若きも秋晴れの下でのゴルフを楽しんだ一日でした。団体優勝は75期、個人優勝は79期の江花和郎君でネット71.8、グロス91と見事な成績でした。圧巻だったのは青山同窓会会長で61期の長谷川義明先輩で、県内屈指の難コースと言われる阿賀高原でグロス86のベストグロス賞に輝いたことでしょう。本ゴルフ会は年二回開催されますので昨年で十一年目ということになりますが、いつもながら押しなべて若手よりも高齢の方が好スコアを出す傾向が見受けられ、逆相関が成り立っているようで、ゴルフは経験がものを言うスポーツということが良くわかります。この会は十年を越え益々盛んになってまいりました。この記事を読まれて一度参加してみようと思われた方は事務局までお申し込みください。

同期が三名以上揃いますと同期上位三名の合計スコアで争われる団体戦参加資格も出ます。ゴルフの後の表彰式を兼ねた懇親会も楽しく、スコアもさることながら先輩後輩入り混じって楽しい交流ができること請け合いです。

次回開催は、平成十九年五月十三日（日）紫雲ゴルフ倶楽部です。奮ってご参加ください。

《参加希望・問い合わせ先》
〒九五一－八六五〇
新潟市西湊町通
三－三三〇〇－三
㈱本間組内
青山ゴルフ会事務局
電話
〇二五－二二九－八二〇〇
（担当　脇坂・本間）

四十年振りのハルピン

上村（川瀬）嶺子（68回）

私は昭和二十八年八月迄、小学校一年生後半から六年生の半ばまでの約六年間をハルピンで過ごしたので、ハルピンは私にとって大変思い出の多い故郷です。そのハルピンは一九九四年九月中旬約四十年振りに両親と主人の四人で久方振りに訪れる機会に恵まれました。

四十年前は三ヶ月もかかって瀋陽を経由して上海から帰国しましたのに比べ、今回は成田から北京迄四時間、北京からハルピン迄二時間の計六時間で目的地に着く事が出来ました。ハルピン空港から市内に至るポプラ並木の景色が既に懐かしく、ロバの引く馬車、高粱畑、赤レンガ造りの家並みなど子供の頃の記憶と同じ風景に感動しました。宿舎となったハルピン国際飯店（旧ホテルニューハルピン）のまわりの景色、近くの博物館など昔のたたずまいそのものでした。幼い頃の記憶を頼りに博物館近くの目印から、昔通っていた小学校を見つけ出す事が出来、本当に感無量の一時でした。現在はテレビ局の広告部になってはいたものの、玄関奥のペチカ、廊下沿いの壁、校庭の樹木、校舎裏の石炭置き場など以前の状況そのままが残されており、同級生達と遊び廻った頃の様子が目に浮かび消え行く感動に浸っていました。

一方宿舎の近くにあった中央寺院は既になくなっていましたが、近くの路上では果物、野菜、魚、本、衣類等をはじめ自転車の修理屋さん迄日常生活必需品につながる種々の露天が林立していました。すっかり忘れかけていた黒い松の実のような食べ物、トウモロコシの粉で出来たクレープ風のチェンピン等当時と同じ物も売られていました。街中はトロリーバスをはじめ小型バス、タクシー、リヤカー、自転車等あらゆる交通手段の往来が激しく、活気溢れる生活状況に感銘致しました。

翌日、松花江と太陽島を訪れました。子供の頃家族で泳いだり、遠足や釣りを楽しんだ場所がなつかしく、また太陽島には日本庭園が出来ていて、日中の交流が一段と進んでいる事を知りました。

最終日には父の以前の勤め先である東北農学院に向かいました。その途中にあった忠霊塔は今春、既に取り壊されていて影も形もありませんでしたが、勤め先は現在ハルピン医科大学として無事にあり、四十年前帰国の送別会を開いて頂いた事を懐かしく思い出しました。

現在、日本は治安の良さをはじめ、気候、政治、経済、道路、通信や教育等あらゆる面で本当に恵まれている事が外国と比較してよく理解出来ました。戦後の一時期には私も一命を落としかねない時に無事帰国出来、また最高学府の学校教育も受ける事が出来た事を大変感謝して居ります。

ハルピンをはじめ中国は現在大変な建築ラッシュです。あの小学校もやがては取り壊される運命にあるのでしょうが、その前に今回訪問出来た事は本当によかったと思います。中国人の活気溢れる生活状況は日本の戦後にも似ているかと思いますが、今から何年か後にはハルピンも素晴らしい近代都市に生まれ変る事でしょう。

追記

青山同窓会報（平成十八年一月一日発行）に『中国生活の思い出』を掲載させて頂いた処、高校同期生の中のS氏が私と極めて似た経験をされながら同じ帰還船で中国から帰国されている事を知り大変びっくり致しました。

正調　嗚呼　Oh！援歌！！

行田　充（84回）

昭和五十年四月、恒例の応援練習の直前に、ある先生（確かに青山の先輩であることは間違いないのだが、名前は失念した。体育教官の誰かだったような気がする。）に呼び止められた。その先生の話では、「最近の青山同窓会で歌う応援歌が、年代によってずいぶん変わってきている。大先輩からせめて『丈夫』と『新潟中学校校歌』だけでも原曲に戻すことは出来ないか？と強く要望されている。そ

して、それは君にしか出来ないことだ！君が、それが出来る最適の応援団長だ！と、のせられてしまった。ついては、「今年の新入生に是非正調応援歌を教えて欲しい」と、青山OB先生方数人で録音したカセットを渡されたのだった。

その正調応援歌を聞いておどろいてしまった。歴代の応援団に歌い伝えられるうちに少しずつ変わったようで、二十数年前の応援歌と我々が教わり、歌っていた物とはリズム、テンポ等が全く違うものに進化（？）してしまっていた。

それからが大変だった。当時の応援練習は、青陵祭の連合ごとに三年生が一年生の教室に行き昼休みを使って教えていたのだが、教える側を統一する事から始めねばならなかった。各クラスの主だった者にカセットを聞かせ、そのテープ通り覚えるべく特訓を開始した。二年間歌い込んできた我々にとって、「丈夫」は我々が習った物に比べると、テンポは全体的にユックリしたものであり、声を抑揚させる所が二、三ケ所違っていたように記憶している。新潟中学校歌「玲瓏の天」は我々が習った物を浪花節的とするならば、正調は文部省唱歌のようで、どうも馴染みにくい物だったように思う。それでも何とか、三年生は正調応援歌を覚え、それぞれ一年の指導に入り、それなりに教えることが出来た。

約二週間、一年生各クラスでの練習の後、一年生の全体練習、そして全校での合同練習に移っていったが、一年生の正調に二・三年の進化調を修正することが大変だった事を思い出す。

あれから約三十年経ち、昨年の夏、84回生の同期会の中で、最近の青陵祭で歌われた「丈夫」をビデオで見る機会があった。それはやはり、我々の時代と比べ大きく変化した物になっていた。歌は世に連れ、なのかも知れないが、何時かまた我々の時のように「昔の歌に戻そう」という時が来るのかもしれない。

～丈夫のたばさむ征矢の
ソレッ！

同窓の本

自著を語る「化学者たちのセレンディピティー」

東北大学名誉教授　吉原　賢二（55回）

明治末期に発表された新元素ニッポニウム発見の報告は、その後確認がおこなわれないまま、いつか幻のように見なされていた。発見者小川正孝（東北大学総長）の名もほとんど忘れられていた。

ところがニッポニウムは本物の新元素で、現在の七十五番元素レニウムだった。これを証明して見せたのが筆者のここ十年間の研究で、朝日新聞や毎日新聞の科学欄やコラムに紹介され、岩波ジュニア新書に採用された。

筆者のこのニッポニウム“再発見”は何も自慢話を繰りひろげるためのものではない。先達の血のにじむ努力のあとを検証し、若い人たちの志を鼓舞したいためであった。そこでニッポニウムからさらに話を展開させたのが表題の本である。

科学上の大きな発見や発明については、しばしば“セレンディピティー”といわれるものが関わることが言われる。二〇〇〇年末、白川英樹博士がノーベル賞を受賞した折、「セレンディップの三人の王子」の話にちなみこの言葉を引用してから、よく知られるようになった。辞書には「思わぬものを偶然発見する才能」とある。日本語訳として「偶察力」や「幸福な偶然」を提案する人もある。“ひらめきという名の無上の発見能力だ”と私の友人は言っている。

本書の中では近代日本の化学を築いた十二人の科学者の伝説が語られている。前述の小川正孝を先頭に、国際的に評価の高い業績を上げた人々が含まれている。福井謙一博士は京都大学の研究室が焼け出された中、友人との議論を通じて、フロンティア軌道理論を生み出し、のちにノーベル化学賞をもらう。福井博士はすばらしい着想を思いつくと夜中でも起き上がって書きとめておく人だったそうで、夫人が驚き、敬意を払っていた。その他新しい装置で積極的に実験に取組む水島三一郎博士も、未知の現象に対してすぐれた感性をもっていた人であった。セレンディピティーはこういう人たちに働く。その他本書を読めば過去の化学者の志がわかり、将来の発展のために大いに参考になる。

（東北大学出版会、二〇〇六年六月発行、税込一五七五円）

事務局より

寄贈品について

過日、46回生の富所強哉氏から貴重な品を寄贈していただきました。それは、「級長バッジ」「水上大運動会の手ぬぐい」「水泳の手ぬぐい」の三点です。富所氏によると「級長バッジ」は級長を示すバッジで、当時制服の右襟につけ、交替時には返還する貸与品だったそうです。「水上大運動会の手ぬぐい」は二学期に行われたボート競技（白山神社の上流から昭和橋上流までがコース）の出場者への参加賞で、絵柄は毎年同じだったそうです。「水泳の手ぬぐい」は昭和十二年の創立記念日水泳競技のクラス対抗の参加賞だそうです。どれも往時の青春を懐かしく偲ばせる品々でした。

なお、今回富所氏から寄贈していただいた「級長バッジ」は、中央に「中」の字がある桜の図柄で、青山百年誌に記載されているものとデザインが異なっております。このことについては確認中ですが、ご存じの方は同窓会事務局までお知らせ願います。

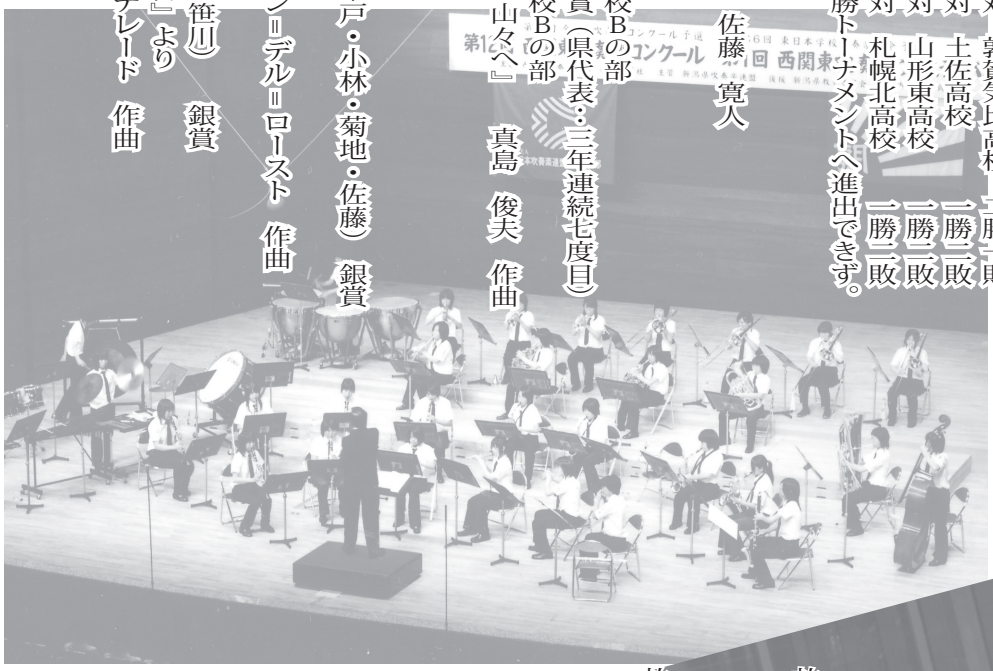
母校は今

後輩諸君の活躍（文化部）

一、将棋部
県 大 会　新潟高校男子Aチーム　優勝　全国大会へ出場
（若林　祐・熊西　亮介・阿部　裕之）
全国大会　予選リーグ　対　敦賀気比高校　二勝一敗
対　土佐高校　一勝二敗
対　山形東高校　一勝二敗
対　札幌北高校　一勝二敗
以上一勝三敗で決勝トーナメントへ進出できず。

二、囲碁部
県 大 会　Cブロック三位　佐藤　寛人

三、吹奏楽部
吹奏楽コンクール
新潟県吹奏楽コンクール　高校Bの部　金賞（県代表・三年連続七度目）
西関東吹奏楽コンクール　高校Bの部　銀賞『虹は碧き山々へ』　真島　俊夫　作曲
新潟県アンサンブルコンテスト
クラリネット七重奏
（青山・菊池・小池・半戸・小林・菊地・佐藤）　銀賞
『プスタ』より
J．ヴァン＝デル＝ロースト　作曲
木管四重奏
（尾嶋・小野寺・桜井・笹川）　銀賞
『フルート吹きの休日』より
J．カステレード　作曲



二〇〇六年度　放送部大会記録
放送　第五十三回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト新潟県予選　六月二十三日
（団体）
ラジオドキュメント部門　第二位「路」
テレビドキュメント部門　第一位「縁の下のももかわさん」
創作ラジオドラマ部門　第一位「またのおこしを」
創作テレビドラマ部門　第二位「バトンに乗せて」
研究発表部門　「説得力のある映像作り」
（個人）
アナウンス部門　第一位　坂本　愛
第二位　浜田　利雄
第六位　郷　慎久朗
第六位　児玉　美夏
朗読部門
放送　第五十三回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト全国大会　七月二十七日
（団体）
テレビドキュメント部門　優良賞「縁の下のももかわさん」
創作ラジオドラマ部門　制作奨励賞「またのおこしを」
放送　第三十回全国高等学校総合文化祭放送部門　八月四日
（団体）
ビデオメッセージ部門　「LINK×age～ひとことひとことのつながり～」
オーディオメッセージ部門　「一杯にかける想い」
（個人）
アナウンス部門　坂本　愛
郷　慎久朗

総会実行委員長挨拶

白井　行雄（79回）

新年明けましておめでとうございます。昨年の総会より、76回の北村幸輝先輩の後を受けて、総会実行委員長を仰せつかりました。委員長を引き継ぐに当たり、同窓会ホームページでの総会ご案内と、案内発送数を千四百通程増やしていただきました。返信用に官製はがきを使わず、料金受取人払制度を利用することで経費を抑えることができました。また、実行委員会に91回の方にもお入りいただきました。幅広い年代の同窓生の方々に、気軽に参加していただく交流の場になりますよう、努力したいと存じます。平成十九年度総会は、七月十三日（金）に開催いたします。年に一度、新旧校歌と『丈夫』を腹の底から思い切り歌ってみませんか。皆様のご参加をお待ちしております。

総会実行委員会

会　長
長谷川　義　明（61回）

副会長
風間　士　郎（64回）
石田　瑞　穂（67回）
敦井　栄　一（69回）

幹事長
富山　修　一（75回）

実行委員長
白井　行　雄（79回）

副実行委員長
栗原　道　平（82回）
渡辺　毅（85回）

顧　問
江口　良　助（61回）
渡辺　国　夫（72回）

実行委員
佐川　八重子（67回）
大森　ゆかり（69回）
笠原　大仙（70回）
小畴　弘一（73回）
河崎　順昭（74回）
小島　富美子（75回）
北村　幸輝（76回）
小林　敬直（78回）
砂田　徹也（81回）
小林　しほり（82回）
駒井　早苗（82回）
吉田　徳治（83回）
行田　充（84回）
渋谷　聡（88回）
後藤　透（91回）

現職員
五十嵐　公（81回）
玉木　正己（86回）
押木　洋（87回）

広報委員長挨拶

広報委員長　戸松　秀雄（67回）

新年明けましておめでとうございます。平成十八年度総会に於いて、設置が決定された広報委員会（編集部会・ホームページ部会）の委員長を委嘱された戸松秀雄でございます。責任の重大さを感じております。

「青山同窓会報」は従来編集長一人ですべての作業をしておりましたが、平成十二年、当時の幹事長（現副会長）石田瑞穂さん（67回）が会報編集を担当してほしいと十名余の編集委員が指名され、私もその一員として活動を続けて来ました。いろいろな分野で活躍している同窓各位の絆となり、前途有為な現役との懸け橋になれるような会報づくりを夢見ております。ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

また、三年程前から検討されておりましたホームページも今回陽の目を見ることになりました。ホームページのURLは、会報下段枠外に掲載しております。

会員各位のご活用をお願いいたします。

広報委員会

会長
長谷川　義　明（61回）

幹事長
富山　修　一（75回）

広報委員長（会報編集長兼務）
戸松　秀雄（67回）

会報編集部会
石田　瑞穂（67回）
池主　憲夫（68回）
中野　久（71回）
石井　智裕（79回）
石沢　浩（79回）
小林　しほり（82回）
高橋　建造（84回）
入田　康夫（96回）

ホームページ部会
坂井　奈津子（96回）
笹川　薫（通37回）
鈴木　紀子（80回）
五十嵐　公（81回）
吉田　徳治（83回）

校内幹事
玉木　正己（86回）
押木　洋（87回）

平成 17 年度青山同窓会収支決算書

（自　平成 17 年 4 月 1 日　至　平成 18 年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　目	予算額	決算額	差異
前期繰越金	2,025,336	2,025,336	0
Ⅰ収入の部			
入会金収入	860,000	856,400	3,600
会費収入	5,300,000	6,026,455	△ 726,455
雑収入	1,000	2,218	△ 1,218
当期収入合計	6,161,000	6,885,073	△ 724,073
合　計	8,186,336	8,910,409	△ 724,073
Ⅱ支出の部			
人件費	1,140,000	1,120,620	19,380
通信費	1,800,000	1,553,824	246,176
印刷費	500,000	460,592	39,408
慶弔費	150,000	66,000	84,000
会報印刷費	900,000	865,200	34,800
会議費	1,190,000	1,370,739	△ 180,739
卒業生記念品費	300,000	416,325	△ 116,325
補助費	1,300,000	1,261,785	38,215
退職積立預金	100,000	100,000	0
諸費	300,000	186,226	113,774
予備費	506,336	400,600	105,736
当期支出合計	8,186,336	7,801,911	384,425
当期収支差額	△ 2,025,336	△ 916,838	△ 1,108,498
次期繰越金	0	1,108,498	△ 1,108,498
合　計	8,186,336	8,910,409	△ 724,073

平成 18 年 4 月 19 日　上記の通り相違ないことを確認します。

監事　江口　良助　㊞
監事　渡辺　国夫　㊞

平成 18 年度青山同窓会収支予算書

（自　平成 18 年 4 月 1 日　至　平成 19 年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　目	本年度予算額	前年度予算額	増減
収入の部			
繰越金	1,108,498	2,025,336	△ 916,838
入会金	768,000	860,000	△ 92,000
会費	5,700,000	5,300,000	400,000
雑収入	1,000	1,000	0
収入合計	6,469,000	6,161,000	308,000
合　計	7,577,498	8,186,336	△ 608,838
支出の部			
人件費	1,130,000	1,140,000	△ 10,000
通信費	1,800,000	1,800,000	0
印刷費	480,000	500,000	△ 20,000
慶弔費	100,000	150,000	△ 50,000
広報費	870,000	900,000	△ 30,000
会議費	610,000	1,190,000	△ 580,000
講演会費	200,000	0	200,000
旅費	490,000	0	490,000
卒業生記念品代	300,000	300,000	0
補助費	1,270,000	1,300,000	△ 30,000
退職積立預金	100,000	100,000	0
諸費	200,000	300,000	△ 100,000
予備費	27,498	506,336	△ 478,838
合　計	7,577,498	8,186,336	△ 608,838

を追われた後、早稲田大学で教鞭をとっていた影響ではないかと思われる。

④ 東洋美術史学者として

・東洋美術史学者としては非常に晩学で、49歳になってから「正倉院に保存せられる公験辛櫃について」と言う論文を東洋美術雑誌に寄稿。

・早稲田大学の文学部の教授になってから、「法隆寺、法起寺、法輪寺建立年代の研究」という論文を書く。

・会津八一が東洋美術史の研究を始めたのは、大正 10 年。それ以降 37 回古都奈良へ訪れる。これは大正８年に刊行された和辻哲郎の「古寺巡礼」の影響によるものではないか？この本は奈良を単なる宗教的なサンクチュアリから、礼拝の美の地として始めて説いた物。

（３）会津八一の生きかた

① 会津八一の生き方は哲学ではなくまさに美学ではないか。

② この美学と言うのは 1750 年バウムガルテンが最初に唱えたもの。

③ 会津八一は坪内逍遥、島村抱月に続く早稲田大学の美学芸術研究の第二世代に属する。

２．石黒久さん講演

「我がふるさとネパールと
アジア諸国での体験談」

（１）エベレスト登頂時の写真について

① 写真は３３年前　の１９７３年、世界で始めて秋のエベレストの頂上写真。日本人で、植村直己、松浦隊の初登頂から３年目の日本隊として２番目、ヒラリー、テンジンから始まって３７番目の登頂。

② 頂上に立てた旗は日の丸ではなく大成建設の昔の社旗。別に入社１年目の私が愛社精神に溢れていたわけではなく、最初、日の丸を掲げたところ強風にとばされ、リックの中に会社の同僚からお守りがわりにいただいた社旗が入っていて、これ幸いに、相棒の加藤保男君に撮ってもらった写真である。

③ この登山隊の大口スポンサーであった朝日新聞と東京放送ＴＢＳは頂上写真が大成建設の社旗では話にならず、大成のマークを赤く塗りごまかした。

（２）エベレストとのかかわり

① 1969 年大学院生のとき三浦雄一郎氏のエベレストスキー探検隊に参加。

② 大成建設入社２年目に休職してエベレスト登山隊に。４８人もの日本人隊員が参加。総指揮は先日なくなられた、橋本龍太郎元首相。

③ いっしょに登頂した加藤は、この時、足に凍傷を負い、指の先１０本切断してしまった。彼はその後、山への情熱をたぎらせ、再び、ヒマラヤに登り、２０年前、誰もが登れなかった冬のエベレストに単独登頂して、帰路、頂上近くでビバークし、翌日行方不明のまま、帰らないひととなった。

（３）大成建設でのネパールとのかかわり

① 大成建設の現場に出るようになって、建設現場が工事完成まで、大変登山活動とにており、山への情熱をいつのまにか仕事の方に変わっていた。

② ネパールでは最大の水力発電所となったマシャンギ水力発電所建設工事の所長を命じられ、青春をヒマラヤにかけた山男として、ネパールに恩返しとともに山男冥利につきる数年間だった。

③ 昨年亡くなった、新潟高校山岳部の先輩、小林光衛先生の墓をエベレストが見える４千米のタンボチェ寺院に設立した。ここには私のエベレスト登頂のパートナーであった加藤保男君の墓があるが、そのそばに建設することができて、二人がエベレストやヒマラヤの山を眺めながら、いつまでも語り合っているのかと思っている。なお、橋本元首相の奥様久美子夫人からも、先生の墓をエベレストの見える同じところに建てたいとの話しがあり、現在検討中。

（４）「我がふるさとネパール」への思い

・「ヒマラヤのある神秘に満ちたネパール。現実に仕事のうえでの、思うように行かないもどかしさを常に感じるネパール。これらの思い出が、いつもよみがえります。」

・「人生の半分以上ネパールと携わってきたわたしは、わがふるさとネパールと言えるようになってきているのかなと感じます。」

第 3 回青山学術文化講演会開催報告

（平成 18 年 10 月 21 日　新潟高校大講堂に於いて）

石原　基規（88 回）

昨年 10 月 21 日第 3 回青山学術文化講演会が、新潟高校大講堂において開催されました。私は新校舎についてほとんど知りませんでしたが、私がいた時代と違い、あまりに立派な講堂があることにまず驚かされました。

同講演会は新潟高校卒業生で各界において活躍されておられる方々から、有意義なお話を一般の方々にも公開して伺うという趣旨で始まり、すでに第 3 回目となりました。今回の講師と演題は以下のとおりです。

1．神林　恒道さん（65 回卒）
　會津八一記念館館長・大阪大学名誉教授
　「會津八一の美学」
2．石黒久さん
　大成建設アジア統括事務所所長・1973 年日本人で 2 番目のエベレスト南壁登頂
　「我がふるさとネパールとアジア諸国での体験談。」

恥ずかしい話ですが、今回、神林さんの講演を拝聴するまで郷土の偉人會津八一を単なる歌人としか思っておりませんでした。しかしながら当初は英文学を学び、あの小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）にも影響を受けていたことなど、そのルーツに触れることができ、認識を新たにさせられました。

また石黒さんの講演では、日本人で 2 番目となるエベレスト登頂について、ユーモアたっぷりのエピソードと、先ごろなくなられた登頂隊の隊長だった橋本元首相との係わり合いを臨場感あふれる語り口で楽しく伺う事ができました。

以下文面の都合で、詳細をお伝えすることはできませんが、一部を抜粋してまとめさせていただきました。

1．神林　恒道さん講演
「會津八一の美学」

（1）はじめに

① 現在没後 50 年と言うことで会津八一特別展を開催中。没後 50 年と言うと著作権が消滅したということで、完全に歴史上の人物になったといえる。

② しかしながら郷土の偉大な先輩である会津八一を、特に若い人には何者なのかあまり馴染みがない。若い人にもより会津先生を知ってもらいたいと言うことで、今回の企画を立てた。

③ 展示物には、早稲田大学から香薬師－これは戦時中に盗難に会ったため、レプリカとなるが－を借りて来た。それと会津先生が歌われた有名な歌の「水煙の　天つ乙女が　衣手の　隙にも住める　秋の空かな」の薬師寺の塔の水煙。ブロンズ作りで、片面だけで１２０ｋｇのものを両面。そのほかにも会津先生にかかわる墨蹟など。

（2）会津八一とは何者なのか？

① 歌人として
・新潟高校にある歌碑
　「ふなびとは　はやこぎいでよ
　　ふきあれし　よひのなごりの
　　なおたかくとも」
会津八一は自分の作った歌を繰り返し繰り返し唱える。そしてその中で一番響きのいい物を選んで、そして推敲に推敲を重ねて歌を作ったということをしていた。この歌も大変しらべのいい歌になっている。
・会津八一に影響を与えた詩集にドイツのハイネの「北海」Nordsee がある。北方人会津の「南方憧憬」の念は、『南京新唱』の絶唱となって示された。
　「やまとじの　るりのみそらに
　　たつくもは　いづれのてらの
　　うへにかもあらむ」

② 書家として
・正統派の書体ではなく、無骨な感じの書体で、良寛に通じる破格の書といえる。
・しかしながら、会津八一が漢文学をどこで学んだかよく分かっていない。

③ 英文学者として
・坪内逍遥に可愛がられた影響から、早稲田大学で英文学を学び、後に早稲田中学で英文学の先生となり、早稲田大学でも講義を行う。
・坪内逍遥の影響を考えれば、普通はシェークスピア研究を専門と思う。しかしながらイギリスの詩人キーツの研究を行っていた。これは小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が東大

青山同窓会会則

第 1 条　この会は青山同窓会といい事務所を新潟県立新潟高等学校内に置く。

第 2 条　この会は会員相互の親睦を増し母校の発展を図ることを目的とする。

第 3 条　この会は前条の目的を達するために次の事業を行なう。
1．会員名簿及び会報の発行
2．青山倶楽部の育成
3．其の他この会の目的を達するために適当な事業

第 4 条　この会の会員は次の者とする。
1．県立新潟中学校卒業者及びかって在籍した者
2．県立新潟高等学校卒業者及びかって在籍した者
3．県立新潟中学校、新潟高等学校職員及びかって在籍した者

第 5 条　この会に次の役員を置き其の任期を二ヶ年とする。
1．名誉会長　1 名
県立新潟高等学校長を推す。
2．会長　1 名
3．副会長　3 名
会長・副会長は総会で会員の中から選出する。
4．幹事長　1 名
5．副幹事長　若干名
6．監事　3名以内
7．常任幹事　若干名
8．幹事　若干名
幹事長以下幹事迄は会長が委嘱する。
9．顧問　総会の承認を経て推戴する。

第 6 条　役員の任務は次の通りである。
1．会長は会務一般を総理する。
2．副会長は会長をたすけ会長に事故あるときは代理をする。
3．幹事長は会長の命を受けて会務一般を執行する。
4．副幹事長は幹事長をたすける。
5．監事は会計を監査する。
6．常任幹事はこの会の事務を行なう。
7．幹事は会員との連絡を図り事務を分担する。

第 7 条　この会は毎年一回総会を開いて会務の報告及び諸般の事項を審議する。

第 8 条　総会及び役員会は会長が招集する。

第 9 条　この会は役員会の承認をもって、委員会を設けることができる。
2．委員会の規則は、役員会において別に定める。

第 10 条　この会の経費は基本財産、入会金、会費、寄付金其の他で支弁する。

第 11 条　この会の会計年度は４月１日に始まり翌年３月３１日に終る。

第 12 条　前年度の決算は総会に報告して其の承認を得なければならない。

第 13 条　会員が多数存在する地には支部を置くことが出来る。

第 14 条　この会の会則は総会に出席した会員の過半数の同意がなければ変更することが出来ない。

附則　平成１８年７月１４日　第５条変更　第９条追加

事務局より

同期会を開催される期の幹事の方へお願い

同期会の開催に合わせて、是非、会費納入者の拡大にご協力下さい。早めに、開催の期日を連絡頂ければ、事務局で、同窓会報・会費納入のお願い・振込用紙そしてＡ４サイズが入る角２の同窓会封筒を人数分用意しておきます。よろしくお願いします。

会報へ寄稿される方へ、原稿字数のお願い

原稿の字数は八００字から一０００字の間で書いて下さるようお願いします。一０００字以上ですと紙面の関係で載せられなくなりますのでよろしくお願いします。

表紙題字・・小川　和恵（101回）　イラスト・・池主　憲夫（68回）

陽田　ナツ子
渡辺　文美子
渡辺　美恵子

30回Ｓ 63年
佐藤　英明
長濱　隆道
本多　孝一
増田　朋子
山井　芳子
山田　光英

31回Ｈ１年
石井　幸代
金子　よう
菊地　正明
関　テル子
滝澤　公晴
田巻　ナホ子

32回Ｈ２年
伝川　里子
山賀　利夫

33回Ｈ３年
津端　キヨ
渡辺　作司
渡辺　むつ子

34回Ｈ４年
今井　純子
大嶋　知子
関川　亮子
田中　博子
吉澤　ミエ
米山　賢治

35回Ｈ５年
安達　啓子
伊藤　歌余子
逢坂　澄子
黒川　シヅ
齋藤　康男
田中　昭夫
福田　知恵子
武者　敏夫

36回Ｈ６年
椎谷　郁子
本田　芳和

37回Ｈ７年
神林　早苗
笹川　アヤ子
笹川　薫
種村　佳世
藤木　明美
横山　千代子
渡邊　タマエ

38回Ｈ８年
柿崎　フミ子
木津　進
轡田　敏春
成田　二郎
古瀬　勝人
三須　猛
渡辺　ともこ

39回Ｈ９年
安藤　智恵
大嶋　タマ
国井　正則
小林　弘
塩原　マス子
高橋　喜代子
庭山　正憲
樋口　節子
山岸　貴志
吉野　一男

40回Ｈ 10年
飯島　イツ
曽我　昭仁
永原　正朋
星　恒市
本間　健一

41回Ｈ 11年
今井　久枝
菊池　和夫
佐野　崇
早川　喜恵子
藤田　桂子
本間　明子

42回Ｈ 12年
畔柳　圭
岡田　武雄
金野　真紅
田村　義孝
星野　レン子

43回Ｈ 13年
久我　亜紀子
遠山　千代
古川　千恵子

44回Ｈ 14年
石原　マサ子
近　雄介
鈴木　邦彦
成田　こずえ

45回Ｈ 15年
大杉　貴美枝
佐藤　一彦

46回Ｈ 16年
大崎　シズ
小柳　トミエ
海津　由美子
佐久間　裕実
鈴木　一徳
田中　優亮
丹後　沙穂子

47回Ｈ 17年
小森　雅且
志賀　純子
目黒　よし子

48回Ｈ 18年
上杉　昭子
遠藤　有希子
小林　純子
高津　修
塚野　由子
水落　文子
宮島　仁
山川　京介
渡邊　まなみ

川上陽子
北村幸輝
櫛谷さわ子
久住　治
小島隆平
近藤壽邦
齊藤幸治
斉藤正行
坂上三雄
佐田克巳
菅原正廣
鈴木茂夫
鈴木正博
高山豊雄
竹内誠司
武田英徳
田代雅春
田代良子
棚橋定衛
太原まゆみ
田宮洋一
田村俊作
戸枝哲郎
中俣正美
長北　学
長沢菊男
名畑哲雄
不二崎順二
細谷洋一
本図雅雄
本間村紀
三浦まゆみ
水間秀一
箕輪光泰
村山ひろみ
村山裕一
安田充年
山内春夫
湯本雅恵
吉岡　俊
鷲尾栄作
渡辺　薫
渡辺　力
渡辺春夫
渡辺　拡
渡辺雅夫

77回S 44年
天尾雅実
石川鋭一
猪股律子
遠藤良二
大塚忠雄
尾崎邦明
片山　等
川崎俊一
神部　昭
北村一雄
木村正史
木村廉平
小池博実
小林　悟
近藤　敬
斎藤繁夫
佐藤　茂
佐藤壽秀
清水道雄
杉崎真実子
瀬賀孝子
瀬野正英
曽我恒有
高野孝治
田代芳太郎
田中悦子
田中裕介
田辺重幸
田原隆夫
中矢　明
永井恵一
永井　透
西　和男
長谷川次郎
日野浦広昭
藤崎克己
桝山健一
松崎澄義
水野義行
山田恆樹
渡部五男

78回S 45年
相田浩輔
青木孝一
板井一彦
伊東真知子
岩城文夫
岩瀬耕一
遠藤和男
大久保昌邦
太田祐一
小田哲史
小田勇司
小野真知子
金沢　宏
金沢泰子
木村和夫
久住民男
桑原正順
小林和人
小林辰次
小林直毅
笹川孝子
佐々木　巌
志藤洋子
清水幸栄
曽根　正
高橋　隆
高橋博樹
滝沢恒世
土谷　厚
寺尾　綾
長谷川多鶴
長谷川まこと
肥田博子
福原　等
本間健治
水野秀樹
水本秀樹
皆川信子
向井美夜子
吉澤哲彦

79回S 46年
青山義明
浅井敬一
五十嵐康之
石井智裕
石田まさ子
井上隆二
猪股裕紀洋
今井　誠
今井幹文
植木秀任
枝並和男
岡島　初
岡田　均
小原正男
片岡道夫
勝山　昇
河　正子
川合千尋
川上康夫
河野雅子
神戸和彦
北原宏一
木村泰博
久保田愛子
倉田由美
桑原直樹
小泉仲之
高坂浩子
笹川富士雄
佐々木隆輔
佐藤和明
佐藤晃一
佐藤たつ子
佐藤富士夫
佐藤玲子
庄司義興
渋谷　昇
白井行雄
新保博史
鈴木正昭
髙橋淳二
髙橋正良
髙橋由和
田阪憲昭
田中　隆
谷澤龍彦
玉井美穂
豊島宗厚
内藤真一
野島常雄
野村正史
林　睦
藤井大三郎
藤巻則夫
保苅俊治
前田和夫
丸潟　孝
三保恵美子
村井圭子
横川憲司
横山由美子
吉田至夫

80回S 47年
阿部郁男
池　淳一
伊藤　明
伊藤俊輔
植木邦彦
太田啓子
大塚善紀
小片　守
小野秀子
加藤新一
上村　諭
菊池隆宣
菊池のぞみ
小池雅彦
小林亮介
小山　晃
坂上富士男
佐藤文彦
佐藤正昭
白井一栄
鈴木紀子
高橋麗子
棚橋　忠
玉木友二
津野正裕
長沼正昭
羽鳥敬彦
本間英知
本間政子
枡山康二
山井健介
山崎元義

81回S 48年
相場　剛
荒川　洋
五十嵐　公
遠藤則夫
神田　剛
久須美浩二
桑原　隆
小出千秋
斉藤　直
坂田光子
佐藤弥生
澤口昭一
白石義人
砂田徹也
高橋了子
竹石尚史
武田正之
田尻美砂子
田近久志
張　高明
富井信喜
中野恭子
長北敏弥
成澤林太郎
平田栄子
深津茂夫
藤村　修
本間寿晴
真壁　弘
松崎美郎
村山　裕
山田　徹
鷲沢直也
渡辺昭雄
渡辺　真
鰐渕　博

82回S 49年
青木定夫
池田勝久
稲井晶子
大塚英明
風間　隆
日下部朋子
栗原道平
幸村克喜
小林しほり
小林立彦
小針　隆
駒井早苗
小亦　斉
斉藤直子
坂上　極
佐々木広介
佐藤荘一
佐藤　度
澤田俊明
七里佳代
島倉晶子
高橋英明
津野吉裕
戸田史朗
中林昭裕
野崎秀明
生野隆史
福田勝之
本多明彦
本間　聡
真谷誠祐
松浦恵子
宮島一敏
目黒茂樹
八藤後茂樹
山本剛史
渡辺健一
渡辺宣昭

83回S 50年
浅間芳朗
天野　忠
五十嵐杉義
五十嵐謙一
伊藤　恵
今井英雄
牛木宏子
遠藤光郎
岡田　潔
荻荘則幸
奥田美佐都
風間磨理子
河原貢司
菊池正俊
木下康司
熊木みや子
桑原利枝
小島成生
佐藤悌二郎
佐藤　扶
髙橋克人
高橋慶子
高山佳郎
玉木慎一
塚本裕二
鳥羽　健
富山武美
中戸雅博
中村昌子
中山　徹
長澤恵依子
西田博子
仁多見俊夫
藤崎直美
藤田祐子
古川　靖
本間憲之
前川正倫
丸田拓雄
水原章貴
森平淳子
山口虎彦
山作房彦
横山　修
吉澤　篤
吉田　桂
吉田徳治
吉水　敦
若杉　忍
渡辺友昭

84回S 51年
朝倉仁樹
五十嵐英一
今井康晴
岡田憲明
加藤雅一
黒川　香
桑原隆男
小林和幸
小林正史
近藤公男
近藤秀治
郷　秀人
郷　扶二子
斎藤敬子
斎藤高秋
斉藤忠志
鈴木紀夫
高橋建造
高橋裕之
高山有子
田崎和之
野口和子
畠野達郎
丸山正行
宮崎清也
村上　誠
森岡哲夫
行田　充
芳川敦子

85回S 52年
雨木若慶
伊藤正尚
岩崎龍一
大沼文男
奥村　基
笠原　徹
川村和忠
桑原敦志
佐藤隆司
白井　晃
須田昌司
高須洋子
高橋　覚
竹内一彦
筒井敦子
戸枝秋夫
遠山知良
長谷川亮子
星山松太郎
宮村一明
脇野裕子
渡辺　毅

86回S 53年
阿部二郎
五十嵐　実
伊藤健一
稲田秀一
稲月　原
小野島恵次
加賀田　豊
小山妙子
白倉俊隆
瀬谷信一郎
高野　晃
高橋聡子
高橋俊吾
高橋雅利
高松哲也
田中照夫
田辺慶直
玉木正己
坪野俊広
中川佳代子
林　光洋
宮腰重三郎
吉崎芳明
渡辺昭夫
渡辺彩子

87回S 54年
荒川一成
五十嵐昌子
石川裕之
井上　智
今西博一
大久保総一郎
大森克利
荻荘　誠
奥村克彦
押木　洋
小野和宏
加藤真理子
清水忠明
白柏基宏
鈴木秀利
Saltzgaber 純子
土屋真規
林　恭弘
藤本健介
本多　剛
松本俊輔

88回S 55年
五十嵐修一
池田全之
石原基規
江波恒夫
木村裕毅
草間博子
小池真理
小林久哉
小湊知見
白井栄一
鈴木孝晴
常木郁之輔
坪井　望
南場　充
長谷川章子
長谷川　裕
藤木一浩
本間　候
三木公一
峰本義明
宗村信明
吉田　巌
渡辺徳昭
渡邊治夫

89回S 56年
相場恵美子
池　信平
石栗健一
市原綾子
加島彰二
川嶋　薫
倉田裕一
館　麻理子
田村雅彦
遁所直樹
星井利樹
山上浩志
吉井雅典
渡邊克彦

90回S 57年
五百川　浩
岩谷　淳
木口量夫
儀同政宏
齋藤今日子
斎藤俊弘
斎藤道明
斉藤恭広
坂田文彦
隅木信利
袖山敏明
田辺　文
土屋　亨
徳永泰器
富山栄子
村上恭子
村上　肇
渡辺　栄

91回S 58年
市川　健
梶谷敬子
後藤　透
本間正隆
横堀真弓

92回S 59年
今井由美子
小野島あゆみ
河内康志
北尾彰朗

93回S 60年
岩原朋子

94回S 61年
花村竜司
樋口　聡

95回S 62年
浅岡俊宏
中村有里
町田一越

96回S 63年
佐久間岳彦

98回H 2年
田井　洋

99回H 3年
西山浩美
吉澤いとな

100回H 4年
加藤貴之

101回H 5年
秋山浩子
今井慶貴
打越輝昌
小川和恵

105回H 9年
川合健太郎
渡辺淳也

107回H 11年
宮島　望

114回H 18年
風間祥子
川合　暢
國松　諒
窪田知宏
吉川浩江

通信制

1回S 34年
上重正一

2回S 35年
桜井　修

3回S 36年
川端欽吾

4回S 37年
大谷孝二
近藤一弥

5回S 38年
菅原カツ
高橋一夫
星野リエ

6回S 39年
井村助治
高橋富榮
本保銀一
山川春雄
養田太一郎

7回S 40年
天野昭治
内山紀子
片原裕子
高橋茂子
南場健一

8回S 41年
新井シン
金田静江
小林勝代
高橋栄治
二瓶　保
間島キソ子
松縄　清

9回S 42年
木津誠一郎
木村美枝
白井敏恵
橘　栄子
角田清宣
長井豊子
松沢美知子
渡辺一男

10回S 43年
阿部恭平
伊藤洋子
今井明子
吉楽政子
木ノ下健次
佐藤イチ子
立石香代
田辺サチ子
藤田隆一

11回S 44年
朝倉八恵子
刈屋順子
小林幸子
田中清松
広川光子
牧野榮策

12回S 45年
秋間一男
岡村　清
小野塚　操
川崎隆子
斉藤平三郎
田辺辰次
田村幸栄
中屋春美
帆苅庄治
三國令子
皆川　晃
吉野久美子

13回S 46年
青山邦子
五十嵐アイ子
中山雅之
曳田芳江
本保勝晴
山井幸子
吉沢利子

14回S 47年
監物勝英
佐藤芳子
佐藤隆英
伝川末吉
宮澤洋子
矢口和三郎

15回S 48年
石月一義
小松朝子
佐藤久子
山口まり子

16回S 49年
梅田和恵
清水秀子
古川とみ
横山まゆみ

17回S 50年
大橋恒次

18回S 51年
岡村正男
鈴木静子
立川佐智子
本間れん子
矢部恵三子

19回S 52年
勝島テル子
佐藤典子
中林巴子

20回S 53年
上山佳久子
喜多村勇夫
小島英二
嶋田　博
清野喜美男
山崎忠治

21回S 54年
清野義昭

22回S 55年
小林正三
種村昭久
種村惠美子
戸嶋　孝
外山トミエ
藤田栄六
藤田キミエ
松原俊昭
三原仁美
向川幸子
山本ヤヨイ

23回S 56年
太田光雄
岡部　徹
片桐　登

24回S 57年
今井栄作
平井節子
藤田　洋

25回S 58年
青井カネ子
網干　寿
佐久間利一
田代悦子

26回S 59年
石田比芙美
岡田さない
加藤キヌイ
笹本君江
清田輝雄
南雲トミイ
松柳幸子
水澤キヨ
山崎喜男

27回S 60年
阿部幸一
安倍武勇
石川孝子
岡田忠雄
神田絹子
熊田照子
永野正人
松原正之
村山春子
山田幸子
横山さと子

28回S 61年
伊藤雅子
中澤　功
長谷川　勇
星野きよ子
渡辺ハマ

29回S 62年
小野道子
小島綾子
佐々木テイ
白井八重子
竹内正朋
永山豊彦
丸山耕藏

半澤　弥栄子
平田　孝夫
広沢　憲隆
福地　利明
福山　忠利
藤田　佐津紀
古沢　満
星　莞二
堀口　正和
本間　請子
松沢　孝
丸岡　央
宮沢　一彦
村木　健二
矢部　直子
山口　喜康
山口　信
山崎　稔
横瀬　功
吉田六左エ門
渡辺　喜光
渡辺　正弘
渡辺　操

67 回Ｓ 34 年

味方　繁夫
阿部　智
阿部　尭
池　隆夫
石井　恵子
石井　紀男
石田　瑞穂
市原　昭一
一箭　茂夫
伊藤　紀朗
稲毛　千紘
井上　一郎
今泉　信作
大高　道夫
大滝　正通
大野　敏昭
岡崎　功
小川トモエ
小川　宏
奥村　紀男
小沢　秀雄
小野　勝義
鍵冨　靖雄
片桐　英彦
片山　忠一
加藤　弘
金井　邦紀
川崎　ヒロ子
岸田　興治
北沢　和夫
北場　勝也
君　英夫
木村　美智子
倉島　邦彦
桑山　哲治
児島　毅
小林　晋一
小林　政敏
近藤　栄子
斉藤　久美子
阪西　裕子
佐川　八重子
佐々木　邦夫
塩原　満
清水　雄伍
白井　節
菅沼　重登
関根　昭一
瀬下　一三
高倉　亨
高野　宏一
高橋　耿平
高橋　三郎
高橋　仁
高橋　直也
高橋　信夫
滝沢　元
田中　収
田中　直史
玉木　直子
寺井　宏
戸松　秀雄
堂垣内　弘一
中野　仁
橋本　秀子
濱田　達郎
原　敬治
一柳　肇
広野　達彦
福山　忠昌
星　允
本間　寛
松井　建吾
松川　哲之助
松島　啓二
丸山　鉄弥
丸山　真三男
見田　進
村山　実
山口　文夫
山田　十市
山田　尚男
山田　穣
吉田　一郎
渡部　透
渡辺　脩

68 回Ｓ 35 年

赤塚　五十二
安達　賢司
安孫子　晋治
阿部　俊明
阿部　尚武
阿部　美和子
伊佐早　幸男
石黒　正子
石橋　輝樹
板垣　昭男
伊藤　昌太郎
岩原　修爾
大橋　昌徳
小田　公幸
河西　厚
片桐　靖孝
加藤　健一
加藤　トモ
上村　敦子
上村　晃一
上村　嶺子
川嵜　建治
北村　泰作
草野　佐
小島　専吉
小林　勲
小林　正昭
駒林　進四郎
近藤　和久
近藤　義雄
今野　公和
後藤　林八
齋藤　重信
齋藤　正果
佐々木　賢介
佐藤　薫
佐藤　泰二
佐藤　広則
志賀　惇
鈴木　喜也
須磨　美博
関　隆二
関川　利男
関口　徹雄
関根　紀一郎
関野　敏
高見　潔
滝澤　辰雄
滝沢　猛
竹石　肇
田中　康一
田中　宣男
田中　光弥
池主　憲夫
土田　正
寺尾　正大
中島　輝雄
中村　秀子
中山　紀代子
西原　徹
浜田　庄司
原田　衛
福田　良子
藤崎　昌彦
藤田　実
星野　敬
堀内　孝
本田　建一
増子　藤男
松原　伸子
儘田　澪子
丸山　弘
森田　浩二
梁取　健
横山　清夫
吉原　正博
若松　昌弘
渡辺　泰彦

69 回Ｓ 36 年

阿部　治男
池田　正夫
石川　健一
石本　隆太郎
居城　弘
今井　昭雄
入山　哲郎
内山　康雄
大川　昭一郎
大谷　勝美
大森　ゆかり
岡田　尚子
小川　敏子
小黒　朋弘
笠原　弘
片山　厚生
加藤　滉
鴨下　守孝
木戸　恵子
黒井　幸一
桑原　秀夫
小出　紘
小島　健二
小林　勲
小林　昌二
斉藤　国雄
坂爪　征基
篠川　旦
佐藤　彬
佐藤　孝靖
城田　敬子
菅井　幹夫
菅沼　浩
鈴木　将夫
鈴木　喜典
高橋　義教
田巻　靖雄
玉木　清
田宮　吉睦
敦井　栄一
寺尾　芳樹
栃倉　浩
轟　栄次
富所　忠男
新田　公子
野崎　武敏
樋浦　紘一
細野　義彦
本間　譲
水野　美智子
山崎　高明
山田　栄
吉野　国夫

70 回Ｓ 37 年

浅川　洋一
安達　隆史
五十嵐　健也
井口　礼里
池田　好正
石井　幸子
石原　俊夫
板屋越　麟一
伊藤　善允
猪口　孝
今井　正昭
岩脇　秀廸
歌川　亨一
江口　光夫
大島　勲
大塚　哲夫
岡崎　紘子
岡田　利邦
岡村　誠一
小川　瑞枝
小沢　欣治
小幡　清司
貝津　雅美
笠原　大仙
風間　秋利
加藤　清策
金子　健三
川島　崎夫
川田　昌人
久代　秀雄
栗山　淳一
桑原　和雄
小泉　和代
小嶋　桂吾
小林　紀昭
小松　修平
小山　正一
近藤　東
近藤　光男
齋藤　典子
斎藤　秀則
斎藤　弘道
酒井　ゆき子
坂井　政行
佐川　幹恵
佐藤　たみ
佐野　敏雄
塩原　聰
志賀　安雄
品田　悦孝
菅原　一雄
杉本　正義
鈴木　恵美子
鈴木　攻
関根　俊明
高尾　英明
高野　義樹
瀧波　祐助
田中　信
田中　靖夫
田中　由夫
田辺　豊
塚原　五十六
土田　紘一
鶴木　勇夫
弦巻　烈
出来島　精一
戸田　礼子
内藤　榮樹
中村　啓二
中村　重樹
成海　哲男
新田　誠一
西田　牧衛
西丸　功
能田　直子
野川　晃一
橋本　修
花輪　治
半谷　万里
馬場　照恵
坂西　康英
日江井　敦子
平山　賢一
福嶋　研一
伏見　省三
藤井　朝子
藤井　保男
藤田　文雄
帆刈　睦男
本田　正樹
本間　裕弼
増田　勝弥
松原　紘
右田　洋
水上　和雄
水野　邦生
三原　邦夫
宮下　忠雄
宮原　卓
村田　紀夫
村松　信輔
森井　滋
山岸　憲安
山口　セツ
山田　修
山田　祥子
山宮　士郎
横田　圭一郎
横山　治夫
鷲頭　宏二
渡部　坦
渡辺　允雄
渡辺　芳道
渡部　美那実

71 回Ｓ 38 年

相田　康夫
阿部　尚平
阿部　二郎
阿部　敏弘
阿部　治範
五十嵐　和朗
五十嵐　敦子
五十嵐　修
石田　武威
石橋　達弥
井田　征夫
伊藤　邦彦
伊藤　登
稲葉　雅之
井上　悳
今井　清治
植木　巌根
内山　博勝
大竹　純夫
大野　武男
大野　義彰
大湊　幸二
小川　義一
小黒　俊彦
小沢　和子
小田嶋　壽広
風間　英昭
上所　アイ子
柄沢　卓
川上　紘平
久保田　明子
桑野　ミイ子
小泉　淑子
小杉　修三
木間　勝正
小林　碧
近藤　昌敏
近野　茂
齋藤　誠
坂井　征一郎
佐藤　彬
佐藤　伸郎
佐藤　正之
佐藤　光武
佐藤　礼子
渋谷　良二
菅原　宗人
関川　正利
関屋　真彦
髙橋　則子
高橋　クニ
高橋　健造
田辺　龍治
中島　紀博
中島　正春
長井　義輝
西沢　淳
西埜　孝樹
二宮　武彦
野沢　坦
野沢　正樹
萩野　真太郎
長谷川　周壽
長谷川　守
羽生　清
浜田　敏克
早川　時雄
平岩　武久
平野　晴夫
福井　明子
藤田　昭彦
堀　清忠
本田　春雄
真柄　成一
松原　要一
松谷　邦憲
丸山　鉄彦
三ケ月　稔
宮川　善徳
宮下　育子
村山　薫
村山　克夫
山内　幹夫
山下　進
山田　征二郎
山本　俊介
渡辺　赫子

72 回Ｓ 39 年

青海　道寛
赤川　洋太郎
阿部　勲
阿部　史郎
阿部　雅子
荒井　龍二
安中　道夫
井海　明
石井　達夫
石黒　義裕
石田　庄
伊藤　美智子
今井　美知子
植木　和美
上沼　歓子
上松　正次
内山　正義
追手　巍
大野　義彦
岡村　恒裕
落田　真一
金子　由征
上村　典子
神林　賢治
北村　誠作
黒木　トシ子
小林　純二
小松　久義
小柳　潤
近藤　正
斎藤　古志
斉藤　俊正
坂井　俊明
佐々木　勝
笹谷　秀穂
佐野　正俊
三林　茂男
白井　秀昭
菅又　滋
鈴木　彪
鈴木　理子
早福　千鶴
祖父江　邦子
高橋　悦子
立川　克雄
玉木　功
塚原　弘二
戸田　満弘
冨田　由李
中島　彰
中戸　義興
成澤　栄一
成澤　虞美子
丹羽　正之
根布　秀子
橋本　俊彦
原　絢子
樋浦　孟
古山　恒夫
堀川　武
本間　政春
真柄　顕一
牧野　秀樹
松永　宏五
松原　和子
丸田　尭
丸山　武志
吉岡　弘道
吉沢　篤子
吉田　秀穂
和久井　和彦
渡辺　国夫
渡辺　玄弥
渡辺　毅之
渡部　正敏

73 回Ｓ 40 年

阿部　達也
阿部　裕
石田　レイ子
稲野　和夫
茨木　憲一
岩永　守登
上野　秀夫
大沢　義弘
大塚　正夫
岡村　繁
小川　幹夫
尾口　基
小野塚　眞一
笠井　隆
片桐　利雄
加藤　秀夫
金子　和弘
解良　都代子
小林　桂子
小山　昭彦
斉藤　昭治
篠田　孝
鈴木　淳
鈴木　俊夫
関　伶子
関野　弘賢
高崎　進
高橋　潔
高橋　昇
田村　正一
鶴木　秀司
中野　治
中原　和之
南波　祐二
西　正与
野城　真理
樋口　正昭
平川　博
堀内　徳吉
本間　憲治
本間　紀子
丸山　澄夫
宮崎　由美
森　敬治
山下　俊彦
山田　敏夫
鰐渕　勉

74 回Ｓ 41 年

藍沢　幹人
相場　文夫
五十嵐　由之
石本　陽子
和泉　潤
稲葉　伸雄
薄田　祥子
江口　則男
大島　義宣
大滝　均
大森　寛
奥寺　淳子
風間　雄一
糟谷　好邦
金井　隆夫
金子　吉一
加門　文隆
河崎　順昭
河原　一彦
木下　真由美
黒木　幹雄
小池　哲雄
古賀　良生
坂井　靖
坂上　實
櫻井　正夫
笹川　久男
笹川　雅之
佐藤　俊栄
志田　常弘
関　憲一郎
関口　賢太郎
高木　顕
高橋　秀憲
竹之内　明
田中　秀明
塚野　憲一
坪川　藤夫
戸枝　一明
富樫　孝一
殿内　重政
富澤　慶栄
永井　明彦
波多　哲雄
広神　俊彦
広瀬　秀
藤田　文子
古川　兵衛
本間　裕
村山　績
森澤　盾
谷内田　健次
柳川　紘三
横川　三男

75 回Ｓ 42 年

青柳　豊
阿部　秀作
阿部　恒久
有薗　順子
安西　徹郎
安藤　裕司
石澤　政夫
石田　彰
石田　博樹
伊藤　公
伊藤　啓司
伊藤　隆
岩崎　義則
上田　茂
上原　恒
江口　芳春
大井　裕
大越　公平
大瀧　丈司
大塚　惠子
大野　道子
大原　哲三
岡田　政文
尾形　幸生
押木　泉
小籏　一男
小柳　幹夫
笠井　忠
勝又　宣夫
加藤　勝士
加藤　博
神田　正一
北村　順作
小島　秀男
小島　富美子
小林　正美
斎藤　昭雄
斎藤　謙二
斉藤　みさ子
坂井　克夫
坂井　啓二
坂元　正広
佐々木　珠夫
佐藤　邦雄
佐藤　啓介
佐野　幹雄
佐野　康子
澤田　俊朗
篠田　昭
渋谷　伸一
清水　純
清水　義晴
白玉　謙一
千田　克三
曽我　正男
高木　一宣
高橋　明
高橋　清一
高橋　正
高橋　正明
多賀　美代蔵
田中　純夫
田中　壮太郎
田辺　英志
田辺　静幸
谷澤　悦子
谷澤　隆邦
玉井　正光
塚本　修
常山　佐世子
富山　修一
永井　博子
野上　紀雄
檜ケ谷　正道
樋口　秀夫
廣川　均
藤井　春恵
星野　雅博
堀　一
本間　均
南　博
宮永　進
村木　洋子
村山　謙一
村山　勝
室塚　泰二
百都　健
八木　健
山上　卓夫
山崎　信行
山根　英郎
結城　隆行
渡邊　研二
渡辺　令子
渡辺　新
渡辺　秀雄
渡部　信子

76 回Ｓ 43 年

相沢　初美
相田　光治
荒川　秀夫
五十嵐　博喜
石田　芳博
大井戸　佐紀夫
大橋　誠五
小田　高久
尾張　明美
恩田　雅和
加藤　盛一
金子　義伸
加野　裕資

岡田耕衛
奥村陽彦
小熊勇司
笠原忠克
風間庫一郎
片桐欣哉
片桐啓三
加藤吉策
加藤高弘
金沢栄二
金子忠
木村善章
小林一男
小林正吉
近寅彦
近藤信夫
斉藤茂
坂井熙一
坂井春夫
佐藤明夫
佐藤弘
白井博
曽我浩
高田龍介
種村祥一
中川弘
中村均
永井勝雄
永井克孝
長浜利夫
波田野松重
浜田正昭
早川哲夫
平田次彦
平山詩郷
福島惣吉
福田満
藤崎茂
藤村洋
堀新二
堀内俊夫
本間庄二
前田三郎
間島速雄
松浦祥夫
丸山幸男
宮川幸司
宮沢昭
望月和明
本永祐嗣
矢野教
山谷晧榮
山田寛
行田宏
渡辺達夫
渡部豊悦
和田憲雄

59 回Ｓ 26 年

相川義信
青木久馬
旭祐善
安食裕夫
安倍邦造
新川滋
飯塚実
飯村康一
五十嵐哲夫
池田修次
伊佐修
市川鉄夫
伊藤瑞
井上俊男
宇佐美裕三
牛木素吉郎
園城英二
大石正夫
大川健
大島洋一
岡田久
奥村繁樹
小野寺宏
小柳佳一郎
笠井駿
金巻久
唐津和雄
河合徳壽
川上昭八郎
川上忠男
菊地晴彦
菊池裕
清野孝一
倉品克明
栗林貞夫
栗林重夫
栗林貞一
栗林洋
小池和男
河野誠
小城一廣
小島道夫
小林栄作
小林圭次
小松原金二
笹川一雄
佐藤純一
佐藤進
佐藤吉雄
茂泉喜彦
重野行甫
品田茂博
渋木幸三
島崎毅
白井三男
鈴木誠一
関根彰圓
関根亨
関野光弘
高橋剛一
高橋晴夫
高橋正利
高橋陽一
高見忠
高山昇二郎
種岡健
塚田俊夫
中野文郎
中野誠
中村彰
長島一郎
西脇諭
能登省三
畠中勝
花井進
早山康之
樋口卓
広川均
広野樹
藤田八郎
藤由学
藤原幸雄
堀川兵一
三崎良次
皆川潔
宮田兼好
諸橋丈夫
八島敏弥
山田一介
山宮英世
吉川篤
吉川文雄
吉田陽吾
渡邉敏男
渡辺初男
渡辺満

60 回Ｓ 27 年

阿部彰
井海孝
五十嵐邦一
五十嵐健一
五十嵐弘
伊狩三喜男
池浦厚司
池端哲
石黒忠士
市川豊
入山文郎
上杉雅之
内山真一
大井忠史
大田英男
岡村嘉志
小川秋実
奥田達也
落合夏樹
甲斐佐智男
加賀田實
笠原功
片岡眞
金山常吉
河田鐵雄
神田三夫
切貫久司
櫛谷不二男
熊谷忍
熊倉正司
熊倉登
熊田彰
玄間敏雄
小出直
小島洋吉
小林庄一郎
小林進一郎
小林亨
小林智明
小山功
齋木守雄
齋藤卓史
斉藤邦夫
坂井丈夫
佐々木城
志佐致
清水悌作
杉野剛博
杉山一教
鈴木章司
高城英雄
高野信之
高橋篤生
髙橋進
髙橋栄明
高橋貞夫
田中浩一
田辺寛
田部幸夫
玉木文夫
田村和郎
戸川正弘
徳田浩一
富田悦治
富山和夫
富山佑男
豊岡隆
中村信夫
中山弘
長橋洸
成田禎作
西脇満
野村保夫
橋本行雄
長谷川秀三
長谷川信夫
濱田達三
早武正博
平田大六
広瀬欽次郎
福田博
藤本剛
星野昭夫
星野昇
本間一浩
丸山敏視
向井和夫
宗村健吾
矢川和偉
山崎健
山崎賢隆
山崎峯平
山崎良一
山田誠
山本淳夫
吉田栄男
渡邊修
渡辺晃二
渡辺正雄
渡辺祐吉

61 回Ｓ 28 年

赤堀和郎
浅間道子
浅見昭夫
安宅久憲
阿部徳治郎
阿部富男
安藤友憲
池田元嘉
石井淳
石井壯一
石山謹治
居城慶一
伊藤英子
伊藤良介
今井晃
石見達夫
江口良助
江村隆三
太田賢輔
太田二郎
大滝儷子
大野恭信
奥村啓一
加藤栄一
金子章
川井達夫
川崎栄一
河辺明彦
岸田哲男
北村富士雄
木村昇
木村政雄
熊谷隆幸
倉茂周典
小池弘
小出廣記
小嶋哲夫
小杉秀一
小林貞夫
小林稔
小林元雄
斎藤義明
坂田安之輔
佐々木繁
佐藤眞武
三條和夫
塩谷明
柴田實
柴野良一
清水淳栄
須貝伸三
菅原和明
助川孝雄
鈴木正三
巣山誠之
関根理
高桑暁
高橋均
高橋龍威
滝沢哲也
竹山恒夫
田中宣
田中忠夫
土田常武
富川龍之
中村龍雄
西澤良地
庭山熙彦
野俣徹
羽賀博
長谷川康一
長谷川耕一
長谷川義明
浜口福寿
番場道夫
藤井真夫
藤崎隆三
藤沢敏雄
藤田宏
藤原信雄
古沢善文
本間淑人
湊秀平
向川恒
村田俶
村山国弥
村山健
谷田部信
矢田昌三
山田成吾
結城隆一
横村一郎
若林瑞穂
渡辺和義
渡辺皐哉
和田照子

62 回Ｓ 29 年

青柳正男
安食恒昭
五十嵐昭雄
池田昌之
石黒恒
石田忠郎
石田寛
石田幸夫
岩渕眞
上原明
内山一雄
内山隆之
大高康夫
小黒昌一
貝津徳男
貝沼由紀
加藤美明
角家孝之
神成粛一
木村望
木村亮
小池健治
河野開
小林政弘
近綾子
近藤琢也
近藤哲朗
斎藤晃生
斎藤健
斉藤文志郎
坂井幸男
佐藤勝彦
佐藤晃一郎
佐藤恰
佐藤誠也
佐藤武司
重野直也
柴田仁
白井幸彦
新保利博
鈴木哲夫
曽我健
髙橋健一
滝沢寿美子
田子元
立川国臣
田中昭夫
田中毅
田村貫次郎
田村恭子
遠山晴夫
中川洋吉
中村洋二郎
中村義一
永井梓
西野勲
長谷川舜治
長谷川愫
原滋郎
原正雄
平田邦夫
平原康男
広野耕一
福田生一
藤巻圭介
藤山陽三
藤原岑子
帆苅宏典
星野陸夫
堀栄一
堀口忠五
真壁伍郎
桝山純
町田仁
丸田宥吉
三崎成夫
水野一
皆川重
嶺國和
宮沢敏夫
宮本輝夫
村木修
村木隆
村山悦朗
守口隆夫
山川廣之
結城俊郎
渡邊冨二雄
渡辺順司
渡辺真

63 回Ｓ 30 年

間潔
赤羽良樹
浅野康一
穴澤祐哉
阿部達
荒井正
五十嵐信一郎
五十嵐房子
池治男
石川庄吾
居城正二
市井吉三郎
市川瑞夫
伊藤寿介
伊南純雄
江口律子
大坂敏
大橋道雄
小畑忠夫
小原和子
会正之
柏正平
梶原義郎
加野英資
北村壽一
櫛谷岩夫
栗田雄三
計良伸正
小島不二
小林章営
小林俊雄
小林洋一
小林洋子
近藤昌泰
坂上種男
櫻井競
佐藤正明
白井僖夫
白倉至
杉山弘道
鈴木恒夫
相墨直彦
相馬潔
高木研三
高木章介
髙橋知義
高橋昌生
瀧澤正元
瀧澤一彦
竹山行三
田中貞夫
大坂伝衛
千種富生
土田浩平
土屋信之
戸井田一美
中村瑛
中村輝一
中村道衛
長津栄佐子
二階堂修
西名英輔
西村允
西脇重孝
庭山昌明
長谷川潤治
長谷川正
羽入義郎
馬場政説
平原正男
藤井尚治
保苅由紀子
本田良二
松井光一
松岡京子
松本欣一
真山俊
三浦喜代次
水落義樹
南満寿子
村山弘義
山田恵一
山田豊
山根晴子
山本弘司
湯浅一平
油本暢勇
横田美昭
吉田奎介
渡辺昌夫
渡辺要一郎
和田和男

64 回Ｓ 31 年

青木信道
青木昌巳
阿部欣司
安藤勝利
池浦慶次
石井正巳
植村鞆音
内海公子
江口一弥
大倉孝男
太田健治
大槻修三
小田嶋寿一
籠島廣
風間士郎
柄沢茂
川井文夫
川崎明
菊地可寿子
北村市郎
熊谷勝
桑野光雄
桑山光文
小出達也
小菅秋
小林脩
駒形裕二
近信雄
斉木幸彦
坂井俊一
坂井敬
佐川清士
佐藤章
佐藤幸治
佐藤唯司
佐藤陽一
椎名睦郎
志賀英雄
柴田史朗
嶋岡洵
清水裕子
清水良男
鈴木厚生
鈴木喬
高木睦弘
高橋俊之助
田才邦彦
田代壮治朗
立川實
田中堅一郎
田中恒夫
田辺元彦
谷久
田伏正樹
田巻亮
田村康一
千原久人
塚本暉磨
土屋利之
津野慶浩
坪井正康
中林弘
中村輝久
庭山暢彦
畑野晋也
廣川祐之
藤沢靖郎
星晃
星満
星野邦彦
本間義章
村山俊
森田一郎
山崎雅司
山根伸之
吉川要輔
若槻晃一

65 回Ｓ 32 年

相田稔
浅田和之
安食悟朗
安宅厚
阿部喜久子
阿部正躬
荒川哲夫
飯野勝栄
池隆史
石田三郎
泉達尚
市原民郎
伊藤不二男
岩野一郎
植木昭彦
梅田和良
大崎一治
大島ヒナ
大橋修一
大堀隆夫
小栗政夫
尾崎元
小沢征夫
笠原成美
風間美禰
加藤純一
金巻啓司郎
川合英次
河路明夫
神林恒道
木滑孝一
久保田泰雄
小林茂
小林亘
近藤昭雄
近藤良雄
佐藤勝弘
佐藤貞夫
佐藤孝
三林輝夫
三林美奈子
清水正夫
白井三雄
鈴木達昭
鈴木恒
早福澄子
髙木正道
高橋貞夫
滝澤敏郎
田中実
田辺建一
中野三義
南場良博
難波勝平
二木央
根津重行
野崎睦美
波多野庄英
半澤貢
伏見勝也
藤井青
堀川芳男
本間忠彦
松木美智子
丸山一敏
水野左敏
宮川忠和
村山黄三郎
山崎耕一
山本和親
鎗居成治
吉井士郎
吉田穂積
渡辺正宣

66 回Ｓ 33 年

青木一男
青木忠允
行形和也
池政男
池田葵
今井正雄
薄田芳丸
榎並義允
大野康則
小川亮一
小木順一郎
乙川正次
加藤孝子
加藤靖夫
金子兼三
金子義信
神田征輝
菊池重治郎
熊谷國男
小泉正俊
小林啓志
小林裕子
合田春美
佐藤正孝
里村和彦
鈴木興春
鈴木幸
鈴木滋弥
鈴木隆
鈴木博
関篤司
関本敏雄
高島敬子
高島文治
高野弘
多賀浩子
竹石健一
田中澄夫
田村元吉
富田俊枝
中村英哉
中谷藤太郎
二宮靖彦
野水宏樹
野水雅行
橋本誠
橋本梁
長谷川精一

平成 18 年度
青山同窓会会費納入者

（4月より9月末まで納入のもの）

会費を納入していただきますと「青山同窓会報」を毎号お届けいたします。申し訳ありませんが、納入のない方には「会報」をお送りすることができなくなってしまいます。未納の方は是非３月までにお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

1口　1，000円。

できるだけ２口以上でお願いいたします。

振込先：郵便振替口座
全日制　00650−7−4455　青山同窓会
通信制　00530−1−74207
青山通教部会

全日制

33 回Ｔ 15 年
山添三郎
34 回Ｓ 2 年
江部保治
36 回Ｓ 4 年
風間忠雄
田中武
37 回Ｓ 5 年
小野里寿夫
黒川武三郎
鈴木正二
田中正二
野末武夫
38 回Ｓ 6 年
桶谷勇策
小林三郎
近藤圓
澤野十蔵
関屋俊彦
竹石三男
田村勇作
真柄一衛
渡辺義平
39 回Ｓ 7 年
上原虎雄
小林芳輔
山下八郎
40 回Ｓ 8 年
会田俊雄
鈴木保穂
高田信川
池主憲
真柄慎平
山田金次郎
渡辺信雄
41 回Ｓ 9 年
阿部久二
五十嵐富郎
伊藤一雄
今成隼次
金子清
神田明
洪野玄彰
高田弥彦
髙橋正蔵
長野庫治
富澤五郎
野末正二
八木勝
42 回Ｓ 10 年
今井包和
薄田開元
小泉俊平
東城真佐男
西山秀夫
長谷川頼清
広沢斉
前田隆英
43 回Ｓ 11 年
阿坂英夫
市橋敏雄
鍵冨馨
加藤行輝
菊池芳郎
笹川謙録
佐藤繁
滝沢義雄
田中憲司
浜田昌栄
早船春洋
丸山直威
森田五郎
山際正雄
渡部一郎
44 回Ｓ 12 年
池田元之助
今井仁
小原康作
金子一夫
小池寿哉
小泉大三
近藤芳生
斉藤伸雄
坂井健一
高野伸三
中村健
錦織登美夫
西山尚三
仁多見一彦
早川廣吉
平原芳郎
星野圭
本田一郎
峯木鉄夫
宮川一郎
宮沢正彦
山根俊英
45 回Ｓ 13 年
石原八十秋
扇嘉家
小原稔
笠原義春
金井弥寿郎
酒井敏行
坂爪力
渋谷芳二
志村俊夫
白倉丘
関崎睦男
滝澤久衛
知野正
中村國夫
橋本良材
長谷川渙
長谷川健次郎
治雅樹
円山哲四郎
丸山泰雄
山際昌介
綿井兵衛
46 回Ｓ 14 年
安沢惣平
稲野藤三郎
江口松弘
大津任
小熊幸男
鍵冨春雄
金子政太郎
熊谷大輔
佐藤正利
下勇
菅原一房
関谷栄太郎
高橋敬吉
近沢一
手島恵昭
富所強哉
原泰三
馬場吉衛
樋浦幸喜
広川敏郎
藤巻貫
堀川良平
本田富雄
横山隆二
米原進
47 回Ｓ 15 年
青山信一
伊藤元司
岩谷又武
小田宏治
倉井整
古寺鴻
志賀武司
清水善夫
菅井隆一
杉山弘治
高梨正夫
鳥居俊夫
中野忠雄
中村正秀
新津義雄
広川博
藤田三之助
丸山銕治
森田美寛
山際政次
吉田富忠
吉田六郎
48 回Ｓ 16 年
秋元俊明
天田孝平
飯塚正雄
五十嵐晧太
伊藤正太郎
江口正喜
樫木基
北村英朗
斉藤力
佐藤忠一郎
佐藤素一
杉山静也
鈴木勇
諏訪宏
高松利男
田中利男
土田節也
内藤啓一
廣瀬努
本間五夫
真嶋明
水戸正郎
望月彰
八木正
吉川三吉
渡辺鋲作
49 回Ｓ 17 年
赤松元敏
飯島三良
池田眞吾
稲泉武男
井上正
逢坂邦雄
逢坂猛男
梶山勝清
亀山宏平
木村竜一
工藤弘安
見定民雄
小林幸男
駒林行弘
斎藤敬治
斎藤俊八郎
斎藤増栄
酒井忠正
佐藤武雄
佐藤博
佐野仁三郎
清水直彦
白川保
関富治
高橋幸一
高橋政弥
高山昇一
滝沢信義
竹山行雄
田中久盛
池主淳
坪井清禧
外山芳夫
中村五郎
中村廣徳
永松一久
仁保武人
庭山清八郎
畑新次
幡新守也
濱博世
原雅之
原田湛玄
廣川浩一
広川弘
弘中博元
藤田芳郎
舟崎裕二郎
細野耕爾
堀内憲政
本田正胤
丸田貞介
水本正弥
山口正十三
山口実
山崎武
50 回Ｓ 18 年
五十嵐清
池田成徳
池田信彦
石崎浩
一柳俊夫
犬井政榮
今井弘
岩男仁志
岩沢信夫
江口晃
大石正信
大川正彦
岡田一郎
勝見秀也
金巻昇
上村光司
苅部洋太郎
神田正弥
北村豪郎
轡田勝彌
黒川恒男
小林淳郎
佐藤剛一
渋谷武
白井悦郎
関文雄
瀬谷誠
髙橋忠行
竹田忠夫
田中賢治
田辺尚雄
大黒善弥
鶴田寛
寺田秀夫
時田勇司
中川赫雄
中林茂之
中村一郎
中村晴信
根本洋一
長谷川健作
長谷川陽三
原田敏雄
馬場賢一
福原久
藤井義良
布施栄明
古川聰
堀信誠
本間生
真柄三夫
水野哲郎
宮島新
村山一
山岸芳郎
山田璋治
山田英世
吉澤績
吉村武郎
渡辺欣次
渡辺進
51 回Ｓ 19 年
青木博夫
浅見信夫
荒井奥弘
五十嵐健之輔
今泉笑顔
歌川正博
永木昭治
大関雄策
大滝映夫
大山龍蔵
岡村安雄
岡本耕治
笠原仰二
梶井功
金子富策
河内研太郎
河路渡
川瀬熙
北村茂
小林欣一
小林愼治
小宮富郎
斎川正二
斉藤素一
斉藤了
坂井慎
笹川重男
嶋岡強
菅野浩
鈴木誠二
巣山恵人
髙橋義和
田中敏朗
田中秀夫
田中泰雄
千葉繁太
野瀬弘一
長谷川直大
波田野勇松
花井省次
藤井一郎
藤井英克
藤島武雄
細貝繁男
真島建
真野量次
丸田弘三
丸山幹男
三村一郎
宮島芳郎
村上安仁
百川和雄
八木野恒夫
山田精一郎
横木義男
52 回Ｓ 20 年
青山秀
阿部秋由
阿部晃介
阿部次夫
安東道夫
安藤一郎
石崎昭一
稲村秀元
大野潤豊
岡崎昭児
奥山實
小熊鐵也
小黒和隆
乙川良英
折戸睦男
金居直
河端昭二
北嶋益二
北村三男
小島嘉彦
齋藤泰五郎
斎藤茂美
斎藤志郎
坂井和夫
佐藤秀夫
佐藤陽二
佐藤隆三
里見義泰
澤田義郎
柴田利一郎
真保禎二
鈴木昭
関口次郎
髙橋良雄
田中昭治
田中長助
筑波龍子
坪谷誠
富取徳夫
中川義郎
永井淳一
成田昭一
丹羽昭
野崎一朗
能登彰夫
早川蓁之助
廣川勲
廣川昭二
藤田禮一
古川幸夫
細貝敏雄
本田等
本間英治
本間昭三
三井田彦二
皆川洋作
村島滋
村山玄二郎
森重郎
山川能夫
山崎利兵衛
山田一弥
吉田赳
渡邊亘
亘隆
53 回Ｓ 20 年
浅海典
阿部定一
荒木典雄
飯島銈良
飯野俊栄
石沢嘉彦
板津尭
一柳邦男
稲月作之助
岩永千年
上杉純一
内山昭三
大倉憲吾
大滝侃市
大谷邦夫
小黒昌夫
河合忠衛
小島久雄
小林茂孝
小林松郎
近泰男
坂井武夫
桜井智
笹川徳義
佐藤昭太郎
白井勇
白井道夫
鈴木俊英
鈴木隆造
関根光雄
髙木秀夫
高橋英一
高橋勝彦
高松和丸
高山義一郎
田崎国夫
玉木將二郎
丹後源太郎
長道雄
津野務
中島常雄
中村弘道
中山政夫
長場雅
野口国典
野口俊作
野瀬寛次
野田栄次郎
広川勇
広沢功
福原和夫
藤正彦
藤田秀夫
本田正英
本間敏雄
前川治一
桝潟昭夫
松本伸一
三野昭三
盛山淑郎
諸橋莞治
山作房之輔
山崎典夫
山田豊
若沢典夫
渡辺義隆
54 回Ｓ 21 年
石橋丈夫
礒部昭一
斎藤雅彦
佐藤壮一
寺崎哲夫
保倉修
保倉保興
細野助栄
本田茂
宮重博
55 回Ｓ 22 年
青山昭郎
浅妻昭三
新井勝龍
石本林三
伊藤健二郎
今井兼智
今湊良敬
芋川敏彦
大島壮一
片岡啓一郎
片桐武昭
勝見聡也
金井良司
金子隆弘
川井和夫
川崎貞夫
川又敏郎
小島健一
小山和夫
笹谷哲也
庄司元一
渋木登
進藤仁一
鈴木俊雄
砂山晃
関根博
早福卓
高橋弘
高橋安
田村一郎
千葉繁治
土田達禅
常木剛
等々力和男
富所寿男
外山清
中田繁夫
中村幹男
中山昌麿
西脇進
長谷川直人
長谷川政彦
平山顕二
星井正春
本間義治
前田利雄
真谷誠慧
松浦徳雄
松本明芳
三村一男
宮尾益敏
武藤輝一
村山義夫
守口一郎
山崎賢二
山田甚平
山田源行
吉澤有介
吉田哲雄
吉原賢二
米山俊彦
56 回Ｓ 23 年
赤坂長弥
朝比奈和三
阿部弘昭
網干道雄
市川久純
伊藤泰夫
井上幸衛
今城信敬
岩瀬玲二
上田宏
浦野説衛
江口直禎
遠藤昭伍
大竹多計二郎
大沼淳
大野利夫
岡田弘夫
小田一彦
折戸善衛
貝沼知男
笠原健一郎
加藤勝則
金子昌次郎
岸野健一
久保田剛敏
栗林昭
小嶋芳郎
古寺嘉夫
小林隆太郎
近藤源也
斉藤恒
坂井恒雄
佐藤晃威
島宗栄一
清野誠二
髙塚勝吉
高橋忠
田中孝
中山昭一
中由正男
南雲照三
庭山六郎
野沢英雄
畠山茂
原英二
伴昭彦
廣川宏
藤井泰介
星野健二
堀藤四郎
松井昭五
松尾直樹
三上昌
三崎正一
村川順三
目黒剛
山崎洪二
山本幸正
横山芳郎
若槻馨
渡部義一
57 回Ｓ 24 年
大川進
川口政行
清川坦
駒形勇松
鈴木廣
中野進
福田克彦
室谷昇平
58 回Ｓ 25 年
青柳廣士
赤塚行司
阿部隆
五十嵐治
池田成義
植村末哉
歌代荘平
内山準之助
遠藤整治
遠藤照雄
大関允良
大山芳郎